

---

# Vampire Blood

天月 琉架

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Vampire Blood

### 【Zコード】

Z06471

### 【作者名】

天月 琉架

### 【あらすじ】

遠い昔の記憶を追い求めるために執念で名門・桜華学院に合格したはずだった淡海凜とうみりん、16歳。しかし1年経つても失った記憶の力ケラが見つかなく、焦燥する毎日。オマケに軽い調子で入学当時から言い寄ってくるセンパイと怪しげな生徒会長が邪魔してきて…！？あと半年に迫った約束を無事に果たすことが出来るのだろうか？現代ファンタジー風学園モノBL小説です。

子供のころ、何の疑いもなく信じていたんだ。  
ただただ、純粋にそうであると思つてた。

透き通るような銀の長い髪。

キラキラしていてとても綺麗だと思った。

小さな手を伸ばしてそれに触れようとすると、その人は優しく微笑んでくれた。

触りやすいようにしゃがみ込んで、代わりに頭を撫でられる。

触つてしまつたら溶けて無くなっちゃうだつたけど、好奇心に勝てずに恐る恐る触れてみた。

けれどあまりのなめらかさにすぐに手の中から滑り落ちてしまつ。何度掴んでみようと思っても、やっぱりスルリと零れ落ちていく。ムキになつて挑む自分を見て、その人は可笑しそうに笑つた。

「お前はバカだな」

くつくつと妖艶に微笑みながら頭の上に乗せた手でグリグリとかき混ぜる。

母親譲りらしいねばたまの黒髪がぴょこぴょこと跳ねてその人の指先をくすぐつた。

「おれは違つもん。バカつて言つたやつがバカなんだよつ

ちよいちよこ悪戯するその大きな手のひらを払いのけようとするが、オトナと口笛モホビの体格差から良い様に遊ばれてしまうだけだつ

た。

ひとしきり駆け引きにもならないやりとりを楽しむと、やんわりと手を離して立ち上がった。

「あれ~どこか行くの?」

「もう日が暮れる。今夜になると危ない。おひさへお帰り」

「やだっ。もつと と一緒にいたいよ~おれ、 こと好きだもん!!」

「ふふ…困ったヤツだな。いつか、お前も私のことを忘れてしまつのに」

「そんなことない! だって、 はいんなにキレーだし、いつもおれと遊んでくれてるじゃん。おれ、友達のことわすれたりなんてしない」

どうしてそんなことを言つのだろ? うか。

自分にとつて、この人は大切な存在だと思つてゐるのに。

それとも「モだから相手にしてもうえないのであるが…。

どうすればこの人の一番になれる?

何をすれば、ずっとずっと一緒にいてくれるんだろう?

そういえば… ひとつだけ思つこた。

「ね、『やくわく』しよう。ずっとずっと、えいえんと一緒にいろいろする『やくわく』」

「永遠に?」

「うん。おれはずつと が好きだもん。もしもオトナになつて… ザッタイありえないけど、それでももしも…おれがわすれちゃつても、また思い出せるよ!」

「お前が大人になつても、か…」

「…おれ、オトナになつたら の一番になりたい。今はまだ口 ドモだから、

は相手してくれないかも知れないけど、オ

トナになつたらもつかいチャレンジする。そんで、『お前が私のイチバンだ』って言わせるんだ。そうしたら、ずっとわすれないでしょ？』

「くく…面白いやつだな、お前は。どうしたら私がそれを言つたらお前は忘れないってことになるんだ？」

まるで夢物語のようにまるきり話を信じてくれず、その人は不思議そうに聞いた。

(おれはホンキなのに)

自分の気持ちがまるで伝わっていくなくて悲しくなる。

忘れてしまつのは最早決定事項になつていて、全然信じてくれない。この人が今まで言うのなら、もしかしたら自分は本当に忘れてしまふのかもしれない。

だけど、どうしても忘れたりなんてしたくなかった。もしも忘れてしまつても、絶対に思い出したかった。

(この人の、イチバンになりたいんだもん…つ。)

自分がそうであるように、この人にも自分のことを好きになつて欲しかつた。

友達だと思って欲しかつたんだ。

「おれ、はくじょーじゃないもん。むしろ、あいじょーたつぱりあるほうなんだ。だから、　　に『イチバンだ』って言われたらうれしくてないぢやうし、ゼッタイにわすれらんない。いつしょーかけてちかつてもいいよ。　　のイチバンになれたらケツコンしてもいい。ほかのヤツなんてビーでもよくなつぢやうよ。だれかのイチバンになるつて、それつくらにスゴイことでしょ？」

最近聞いたばかりの言葉を並べて、精一杯にこの人の気を留めようと思死になる。

本当の意味はまだよく分かつていなかつたけれど、『ケツコン』す

れば『いつしょー』一緒にいるってことだけはなんとなく分かってた。

『いつしょー』の意味が分かんなかつたけど、たぶんずっとずっと、長い時間を一緒にいられることがなんだつて思つたから。その人はぽかんと少し呆けているようだつた。

もしかしたら何処かオカシな言葉を使つてしまつたのかもしない。どうしよ、と思うも、これ以上どう言えばいいのか分からぬ。流れるような白銀の髪と全てを見透かすような左右色の違う瞳。海のような碧い瞳と焰のような紅い瞳を見上げると、そのふたつが思案するように少しだけ伏せられるがすぐに真っ直ぐ見つめてくる。見たこともないほど真剣な眼差しを向けられて、ちょっとだけ怖くなつた。

（怒つたのかな…）

我儘ばかり言つたから、嫌いになつてしまつたのかもしれない。

ただ、自分のことを好きになつて欲しかつただけなのに。

不安になつてその端整な顔を見つめると、その人は射抜くような視線のままそつと自分の頬を撫でた。

「お前が私の一番になつてしまつたら、困るのはお前の方なのに…」「なんでもう一コトいつんだよ。おれのこと、そんなにキライだつたのかつ？」

「そうではない。お前が嫌いだとそこうことなのではなくて…」  
「ただ、私は　なんだ。お前と共に生きるには、支払う代償が大きすぎる」

苦しげに告げられた言葉が上手く聞き取れない。

シハラウとかダイショードかつて言葉の意味も分かんないし。

ただ、その表情からスッ、ゴク大変なことなんだつてことだけは分かつた。

だけど、それでも。

「

の言ひてゐるみがよくわかんないけど、それでもいいよ。

おれ、いのちと のじと以外だつたらなんでもあげるよ」

「本当に…？」

「オトコに一ゴンはないつ」

「ふふ…やうか、小さくともお前も立派な男だつたのだな。分かつた、約束しよう。お前が大人になつて、それでも私のことを思い出すことが出来たのならば、お前に私の一番をあげよう

「ホントウ…？」

約束すると言われてテンションが舞い上がる。

ゼッタイにわすれたりしないもん…つ。

半ば意地みたいになりながら心の中で再度決心した。

「もちろん。ただし…」

「ただし？」

「お前が十七を迎える刻までだ。それを過ぎたら、私はお前に関する一切のことを忘れよう。それでもいいのか…？」

「じゅーしちつて…なんでそんなじゅーとはんぱなんだ…?はたちとかのほーがキリがいいのに」

「だめだ。一秒たりともまけてなどやらぬ」

「けちー」

「私はケチなどではないつ。それ以上我慢を言つのなら約束などしてやらんぞつ…」

「あああああ～～～つ…...『めんなさこつつ、いじよそれでつ…!…!…!』

「ふん、最初から素直に頷けば良いのだ」

そっけなく言つけれど、せんせりでもない様な顔でニヤリと笑みを浮かべている。

やつぱり「ども」の自分では、この人に良い様にあしらわれてしまつ。いつか、オトナになつたら。

口の中で強く誓つた。

「ね、『やくそく』のちかいしよつ」

「誓い? どうしたいのだ」

「ちょっとこっち来て」

ちよこちよこつと手招きをして顔寄せおほせたり、その頬にちよつと口付けをした。

するとびっくりしたように双眸そうぼうを大きく開いて瞬かせている。しばりくすると、ブツと零れるように笑われてしまった。

「なんでもううんだよーっ」

「くく…つ、いや、お前らしいなと思つてな」

尚も笑い続ける人に、なんだか悔しさを感じる。まあでも、約束してくれたのだから良しとしよう。

「ね、おれにもして」

「なぜだ?」

「だつておたがいにちかいあわなくちや、やくそくならなこじやん」

「ああ、やうか」

その人は両の手で幼い顔を包み込むと、そつと柔らかい唇に口付けを交わした。

なんでもほつぺたじやないの…?

ちゃんと同じよにしてくれなかつたことがちょっとびり気に入らなければ、触れられた部分が柔らかくて少し冷たかった。

恥ずかしかったけれど、それでも今までよりもずっと距離が近づいた感じがして嬉しくなつた。

「約束、だな」  
「やくそく、だよ」

もう一度念を押すように約束をしてから別れ、次の日にまた訪れるけれど、そこにはあつたハズのものが何も無かつた。あの人の家も、一人で過ごした大きな一本の桜の木も　　あの人自身も。

苦しくて悲しくて、その日はずっとその場所で途方に暮れていた。それまでの日々がまるで夢であったかのようにボロボロと崩れ落ちていく。

幼い心に残された大きな傷。  
しばらくは自分がどうしていたのかそこだけは今でも思い出せなかつた。

そうして俺は、あとの記憶を失つてしまつた。

## 序章（後書き）

新システム移行時に一部文字変換が違つてしまつていたため修正しましたが、内容に変更はありません。

すべて修正したつもりではありますが、誤字・脱字など、おかしな部分がありましたら教えていただけると助かります。

それとは関係なく、評価・感想いただけたらめっちゃ嬉しいです（^ ^）

どうぞ宜しくお願い致しますm(ーー)m

## 第一話

ふつと目が覚めると、頬に濡れたものを感じた。指先で触れてみて自分が泣いていたことに気が付くと、手の甲で口シゴシと拭う。

（またあの夢か…）

時折見る、切なくて悲しい夢。

大切な誰かと約束したはずなのに、どうしてもそれが思い出せない。とても綺麗な人だったはずなのに、霞が掛かったようにその顔をハッキリと見ることが出来なかつた。

同じ夢を何度も見るせいか、それが現実だったのか夢なのか判断がつかなくなつていく。

ガラスみたいに透明な銀の髪。

不思議な色をしたオッドアイの瞳。

触れた指先は作り物のように白く細長くて。

性別すらも判断出来ないような綺麗な人だったんだと印象だけはなんとなく覚えている。

「…俺、欲求不満なのかな」

自分の言葉にちよつぴり傷ついて、はあ…とため息を一つ零すと顔を洗つて学校に行くべくベットから抜け出した。

淡海 りん  
16歳。

青春真っ只中の高校2年生。

俺には最近、悩みが2つほどある。

### 1つはわざわざの夢の話。

『十七の刻を迎えたらい…』って言葉。

あと半年ほどで17歳の誕生日を迎えるけれど、本当にこのまままでいいのだろうかと思っている。

夢が夢のままじゃなかつたら。

俺はきっと、後悔するような気がする。

あの夢のことがあったから、俺は今の高校に進学しようと思つたくらいだ。

勉強は苦手だけど、何か引っかかる口音があつたらそのままこいつやいけないと思って。

ほとんど本能的なものだったんだけど……ね。

まあそれはおいおい何とかすることして。

それよりも田下の悩みはマジで切実だ。いい加減、どうにかしないと本気で俺は喰われると思うんだ。

それって言ひのが

「淡海、オハヨウ。今田も可愛いね」

つて言つてるそばから来たよ……悪魔が。

登校中の凛に声を掛けたのは、どこからどいつも見ても爽やかそうな顔をした一人の男。

友達でもないのに馴れ馴れしく凛の肩を抱こうとしてくる口音は

鷹司 紅。

去年、超名門進学校・私立桜華学院に奇跡的に合格し、浮かれた気分で初登校した凛に一目惚れしたとかしないとかで、毎日言ひ寄つてきてる。

しかし、鷹司は自他共に認める浮名流しの遊び人で、毎日違う男女（一）を連れているのだ。

この男は桜華学院ミスター№2の人気者で、どうに聞いても目立つて仕方がない。

何度経験しても慣れない、他生徒の好奇心の目。

凛は当たり前のように伸びてきた腕を邪険に振り落とした。

「おはよ〜い！ や〜こます、センパイ。でも何度も言いますが、俺は可愛くなんてないし、男が可愛いなんて言われても嬉しくありません」と、いうわけで失礼します」

「ツレナイなあ。このオレが声を掛けて落ちない子なんていなかつたのに。でも、ソコがまたイイんだよね」

「はあー？ ……つてうわあつ」

そう言つて今度は強引に凛の細い腰に腕を回して抱き寄せる。グッと引き寄せられた凛はバランスを崩して鷹司の胸に飛び込む体勢になってしまった。

くんと鼻先を掠めるシトラスの香り。

爽やかな微香と意外にも逞しい胸板に驚きを覚えた。

(ああもう！ 何なんだよ、この人はうつうつーー！)

いくら男女共にモテまくろーがお綺麗な顔だろーが、男に興味なんかないっつの！

なのに動搖する自分が情けなく思えた。

「何すんですかつ！ …離してくださいようつーー！」

「ええ〜いいじゃん、もつちょっと」

「全然良くないです！ …俺はまだ死にたくありませんつーー！」

こんな道のど真ん中で男子高校生がくつついでいるのだ。

凛に周囲を喜ばせる趣味も（いろんな意味で）鷹司のファン（男女  
多数！）に怨みを持たれるつもりも毛頭ない。

さつきからチクチクと好奇な視線が当たつてかなりイタイ。  
それなのにより抱きしめようと腕を回す鷹司に腹が立つ。

だあーー、もう知らねえっ！！！

ぶちつとキレた凛は、先輩だからとお伺い立てる事なく力いっぱいに突き飛ばし、悪魔の所業から逃れるべくダッシュで学校へと続く桜並木を走り抜けた。

「またやつりまつた…。でもセンパイが悪いんだからしょーがないか」

校舎前まで駆け抜けて、ようやく一息吐く。

それよりもこの現状がどうにかならないかと思案するも、中々良い考えが浮かばない。

とりあえず最初の時に大したことはないと軽く考えて放つておいたのが失敗だった。

けれど今さら後悔しても仕方ない。

一つため息を零して、凛は教室へと向かった。

「凛ーお前ついに王子センパイとくつ付いたって本当か！？」  
「してねーよバカ！！」

ガラリと教室のドアを開けると、開口一番に尋ねられた。  
まだ10分しか経っていないのに何だよこの情報の速さは！

携帯という文明機器にちょっとだけ逆恨みをする。

登校中の生徒は他にもたくさんいたが、それにしたつて自分が来るより情報の方が早いってのはどう考へてもオカシイ。それだけ周囲に興味を持たれていることに未だ気づかない凜は、苛立たしさ全開で怒鳴り返していた。

「まじか～。あー良かった。まさか親友がついに王子に喰われちまつたのかと本気で心配しちまつたぜ」

「…………。お前が、いつぺん死んでみたいよね？」

凛が触れて欲しくない話題にズカズカ遠慮なく聞いてくるこいつは  
悪友・九条 雅人。

「で、本日のハレルヤのやつは？」

見晴らしの良い窓際の自分の席に座るなり雅人が聞いてくる。  
凛は力バンから教科書などを取り出し、机の中に入れながら適当に  
答えた。

「弱い。たまたま登校中でシルバニアが見つからなかったんだから」

「ハンカウン… ておまつ、みんなの王子さまをモンスター扱いす

るか？フツー

「ううせ。俺にとってはモンスターの方が断然可愛いいつの！」

毎度ほぼ口課のように狙われ襲われ口説かれる身にもなつてみる。

おまけに相手はあの鷹司。

いくらお綺麗であるーと全校生徒の憧れであるーと、相手は男。

しかも男女共に手を出しまくるプレイボーイなのだ。

そんなヤツからの言葉など信用性まるでナシ。

本気で相手にするほうがバカなのだ。

何を思つて1年も構つてくるのが分からぬが、からかうのもいい加減にしてわすら欲しかつた。

他のことに煩つてゐる時間など、凜には無いのこ。

(はあ…。)

そのことを思うと自然とため息が零れる。

思い出したいのに思い出せないもどかしさ。

もう喉つかから出掛けかつているのに、あと少し何かが足りない。

雲を掴つかもうとするみたいに手を伸ばしたらあつという間に逃げてしまつ。

「くそ…つ

本当にタダの夢だつたのか？

同じ夢をたまたま何度も見つけてゐるだけなのか…。

タイムリミットが近づくにつれ、焦りにも似た苛立たしさが増していく。

元来物事はハッキリさせないと気がすまない負けず嫌いな性格が、余計にそれを助長させていた。

「どうしたー？最近、機嫌悪いじゃん」

「そうか？悪い…ちょっと、夢見が悪くて」

いくら親友とは言え、あの夢のこと話を氣にはなれない。適当に誤魔化すと、雅人が意味深な笑みを浮かべた。

「ふつふーん、さては恋だな！？」

「はあ？」

何故そななるんだよ、この悪友。<sup>バカ</sup>

嫌そうに眉をしかめるけれど、まったく気づかずに妄想に浸っている。

「ああー、みんなのアイドルがついに恋かあー。無駄にモテるくせに全然興味持たないんだもんな。そんな凛を射止めた相手はどんなヤツだ!? やっぱ凛に負けない美人かな。いやいや、勝気なこいつをメロメロに出来るなんてやっぱオトナの余裕がある綺麗系の年上だろっ」

「……突つ込みどいろが満載過ぎてむしろ何も言えねえよ」

「ん? その条件に当てはまるの? やっぱ王子」

「なワケないだろッッッッ!!」

めぐるめぐ妄想のセカイ。

怖ろしや、他人の想像力。

勝手に妄想されるのも鳥肌が立つほど嫌だが言つても聞かないので、せめてそういう類のものは個人の頭の中だけで完結して欲しい。いや、この場合バカな雅人だけか? と思い直した凛だったが、実は教室内の生徒たちはみなその話に興味深々だったりもする。

……言わないだけで。

そんな視線になど全く気づかない様子の凛は、肘を付いてぼんやりと窓の外を眺める。

窓から流れ込んでくる生暖かい風に吹かれながら、凛はこれからのことを見ていた。

(早く…スッキリしたい)

高校2年の夏はまだ始まつたばかりだった。

## 第一話（後書き）

誤字・脱字、評価・感想などありましたらよろしくお願い致します

m ( — ) m

## 第一話

疾うに見<sup>い</sup>じるを終えた大きな桜の木の傍で、凛はいつものよつと毎休みを過ぎ<sup>と</sup>そうとしていた。

通り慣れた道を通り過ぎ、そつと手を伸ばしてザラザラとした木の皮に触れる。

桜の木は田の前にあるものの他にいくつかあるが、一番樹齢が長そなこの大木がお気に入りだった。

校舎から死角にななつているのがせらに良い。

他人の視線を気にせずゆっくり過ぎ<sup>と</sup>すことが出来る。

凛はどうしりと根付いた木の根元に腰を下ろし、ひんやりとする幹に背を預けた。

初夏を感じさせる暖風が、若干和<sup>わ</sup>らいだように感じる。

「はあ～…」

騒々しい午前の空氣からようやく解放された凛にとって、この場所は安らぎを与えてくれる特別な場所だった。

サヤサヤと揺れる風に乗つて、凛の少し長めの前髪がふわりと流れていぐ。

コンビニで買つてきたパンには田もぐれず、まじめむよつて<sup>まぶた</sup>顔を閉じた。

『お前が十七を迎える刻までだ。それを過ぎたら、私はお前に関する一切のこと忘れよつ』

忘れられたくない。

自身は忘れてしまったのに、相手に忘れ去られてしまつことが酷く

怖ろしいよつに思えた。

どうしてだろう。

何故かはわからないが、早く思い出さなくてはいけないよつな気がする。

とても……とても大切な何かが、壊れてしまつよつな気がして。全ては直感がものを言つてゐるだけなのに、早く早くと急かされる心に自分でも酷く困惑していた。

「サクラ色、か……」

薄紅色の風が舞う様が、銀色と混じつて綺麗だつた。サラサラと流れる桜の花びらの中を踊るように揺れていた。朱に染まつた雪の中で、あの人と……

「え……？」

「何が？」

霞が掛かつた記憶をもつて一度手繰り寄せる。

今、何を思つた…？

凛は軽く頭を振るけれど、一瞬過ぎた何かを捕らえたことは出来なかつた。

目の前には新緑の風と音が穏やかに流れている。

（朱色……？）

もう幾度も続いている消化されない疑問。

（…ダメだ）

思い出せそうで、思い出せない。

何度も続けてみたけれど、いくら考えても仕方が無いと諦めて、当初の目的を果たすべくコンビニ袋に手を伸ばした。

「ん~、一度で一度美味しい『お好み焼きそばパン』はいつ食べて

も絶品だなっ」

炭水化物同士の組み合わせで、どうしたって栄養価は宜しくないのだが好きなものが好きなのだから仕方が無い。

これの他にも野菜たっぷりハムレタスパンとお肉重視のカツサンド、デザートにほんのり甘いクリーミーチーズパンが入っている。小柄な凛の身体の、一体どこに収まっているのか不思議なくらい景気良く消化していく。

一人で吃るのはあまり好きではなかったけれど、友人たちと一緒に食堂なんかで吃べたら量は足りないし騒がれるしで嫌だった。知らない先輩たちに声を掛けられるのも、ハーレム作つてバカみたいに騒いでいる鷹司の存在が視野に入ることも。

そんなことを気にして吃べるよりも、思い出のカケラに残っていたこの桜の木を眺めながらぼんやりと過ごす方が断然良い。

そう思つて口で過ごすようになつてから、少しづつではあるけれど、忘れかけていた何かを掘めるような気がしていた。

「やつぱり、俺は……」

この木が、好きだな…。

食べ終わつた残骸を素早くまとめる、頭を木に預けながらそつと幹に触れる。

ざらざらした冷たい感触。

害虫駆除なんて明らかにしていなさそつなのに、一向に虫が湧く気配がなかつた。

もうすぐ夏なのに、ここだけがいつまでも春を残しているよつた雰囲気がする。

真冬なのに冴え冴えと花開いていた桜。

落ちる花のカケラと雪が舞つて美しかつた。

この木の傍にいると、その時の気持ちが思い起こされるような気がして安らぎを覚えることが出来た。

ぽんやりと辺りを見回すと、一際濃い新緑の葉が周囲を覆い茂つていて荒んだ心を癒してくれる。

凛が揺れる若葉と小枝をぼーっと眺めていると、校舎のある方から人の気配がした。

「……？」

視線だけちらりと気配の方へと見やると、明らかに周囲とは違ったオーラを持った青年が現れた。

遠目からでもはつきりと分かる、スラリとした体躯。

背は高く、襟足が肩に掛かるくらい長めの銀髪がとても似合っている。

冷たく感じるほどクールな視線を宿した切れ長の瞳と、彫の深い顔立ち。

その圧倒的な存在感に息を飲みそうになってしまつ。

(何で生徒会長がこんなことに…)

凛は以前からこの青年のことが苦手だった。

日本人には決してありえない銀の髪と、どこか他人を突き放したような雰囲気がある人に似ているような気がするから。

それに、生徒会副会長でもある鷹司と仲が良いというのも問題であった。

いつも一緒にいるわけではないが、彼がここにいるところは、鷹司もこの場所へ来てもおかしくはない。

なるべくならヤツに遭遇したくないという心理が働いて、自然と彼を見つけると脱兎の如く逃亡するのが常であった。

(くつそくへつ、何で俺のお気に入りの場所に来んだよつ、他にも場所はいつぱいあるつていうのに！)

「のあとのんびりとお昼寝タイムを満喫するはずだつたのに、突然の来訪者に凛は慌ててその場から逃げ出そうとした。  
が、がさごそと荷物をまとめている凛に気が付いた青年が、一いちらへと一警いちべつする。

「げ。見つかつた…」

ヤバイヤバイと焦りながらも急いでその場から離れようとすると。  
青年に罪は全くないのだが、どうしたつて鷹司の存在が恐ろしい。  
少しでも危険を冒したくないといつ自己防衛本能が、とにかく逃げなくては、と頭の中はそれだけでいつぱいだった。

「…待つて」

不意に声を掛けられてぎょっとする。  
話したこともない人間に声を掛けられたつていつのもあるけど、発せられた美声に純粹に驚いた。

一瞬でもドキッとして固まつていると、青年が凛の目の前までやって来ていた。

「キミ、淡海凛だよな？」

「そう…ですけど、あの」

「私は生徒会会长の華園はなぞの英えいだ。」

「いえ、それは知つています。そうではなくて、その…いつも鷹司副会長と一緒にいらっしゃるから」

「ああ、そういうことか。あいつならここにはいない。私一人だ」

「本当ですか！？それなら良かつたつ」

「あ……と安堵の声を洩らすと、華園は少し目を瞠つて驚いていたが、懸念していたことが杞憂に終わってほっとしていた凜は気付かなかつた。

（ああ～良かつた、マジで。会長だけなら特に何も問題ないし。この人、綺麗過ぎて近寄り難いけど、別に悪い人じやないしなー）  
超・名門高校の生徒会なんぞやつているくらいだ。

さぞかし優秀であることは聞かなくても分かつているが、それでは何故こんな広い学校の敷地内でも端つこの方にある辺鄙な場所に彼がいるのだろうか？

ふと疑問に思つて華園の方を見上げると、思いもよらぬ優しげな瞳でこちらを見つめていた。

「……でも、どうして会長がこんなところに？」

「私は時々、ここへ来るんだ。キミがいつも座つている、あの桜の木があるだろ？あの木を見ていると、不思議と氣分が落ち着くんだ」

「……」

この人、俺と同じことを思つてる……

自分が抱いていた不思議な感情を、同じように思つてくれている人がいたことに驚くのと同時に嬉しさが込み上げてきた。

見上げると、いつも冷たいと思つていた瞳がキラキラと輝いて見えた。

（この人マジ良い人っ！つう～つ、何かスッゲエ嬉しいんだけどつ）

うずうずとこの歡喜を表したい衝動に駆られてはいるが、華園はそつと手を差し出してきた。

「凜と呼んでもいいか？私はキミをもつと知りたい」

「え？ あつ、ハイつ！ 好きに呼んで構わないですよ、会長」

凛は差し出された手を取つて握手を交わす。

外見によらず、その手のひらは大きくひんやりと少し冷たかった。  
（何か…）の学院に来て初めて先輩・後輩らしいことしてるぜ、俺

帰宅部である凛が上級生と関わることなど滅多に無く（鷹司は別として…）、クラスメイト以外とはほとんど接触を持たないので、この偶然の出会いを嬉しく思つた。

「では、私のことは英と呼んでくれ」  
「えつ…えつと…じゃあ…英…センパイ？」  
「くくつ…呼び捨てで構わないのに。可愛いな、凛は  
「いえっ、天下の会長様にそんな口上出来ませんよっ」

握った手をそつと口元に持つていかれ、手の甲を反してからかうよ  
う」指先一瞬を落とせれる。

少し屈んで上目遣いに見つめられると、何故かドキリと緊張した。（なつ…なんで俺ってば焦ってんだよ…？）

くよじと呟きを零された手をハサと引いて  
強引に華園の帯から離す。

華園は気分を悪くすることもなく、クスクスと楽しそうに微笑んでいた。

「紅に知られたら怒られるかもな」

「え、何か？」

何言い出すんだ、この人は……？？

頭の中が疑問符だけの凛には状況が正しく理解出来ない。わたわたと慌てていると、華園はそれ以上無理強いすることはなく距離を取った。

「それじゃあ凛、またな。もつ少し一緒に居たいといふだけ、生徒会の仕事があるから」

「あっ、はい。お疲れ様です…」

華園は中途半端な言葉だけを残すとそのまま校舎の方へと去っていった。

凛は数歩後ろに下がるとすると木の根元にしゃがみ込む。

（一体何を考えてるんだ、あの人…）

まさか華園もホモ…

いやいや、無いって…！

しかも何で俺！？

からかわれてるだけだっての…！…

予鈴の鐘がなるまで、凛はしづらいくその中で両面相をしていたのだった。

俺つてば前世で何か悪行を働いたんだろーか…。  
でなければ納得出来ない。

なんだつて俺がこんな目にあつてているんだるーか?

中学時代、成績は確かに中の下だつた俺が、必死こいて勉強したおかげでこの名門校に入学出来た。

入学後もいつもギリッギリだつたけど、口は悪いが頭は良い雅人の世話になりながらも勉強してきたし、生活のためにバイトにも精を出してきたつもりだ。

それが…

それなのに、何で…

「ふつ。お前、追試だつてな? バツカで~」

「うるさいッ。お前のヤマが2割も外れたせいじゃねえかっつ  
「バカ言え。8割も当たつてるのに何で赤点取るバカがいるんだよ

最低限やつていれば70点は難かつたのに。と雅人に頭を小突かれながら、凛は理不尽なハつ当たりをしながら机に沈没していた。  
本来、試験というものは己の力で乗り切るものなのに、当たると評判の雅人のヤマを当てにし過ぎた上に、そのヤマカケ部分の勉強すらも怠つていたので、もはや自業自得…なはずなのだが。

ああ～、もうマジ最悪だ。

このままじゃ夏休み中の補習は免れそうもない。

なんと言つても、前回の中間試験も散々で、赤点ギリギリだつたのだ。

いや、正直に告白すると、幾つかはアウトだった。

でも縋る様な気持ちでそれだけは勘弁してくれと専任の教師にお願いしたら、『次回頑張れ』と言つてもらえたのだ!

だからこそ、頑張った…ハズだったのに…。

「淡海<sup>おひみ</sup>、今日は付き合つてくれるよね?」

いくつかバイトを減らさないとマジでヤバイ…  
留年なんかしたらマジで一生の恥だつ。

いや、つていうかその前に学費が払えないぞつ…!?

ああ…でもでも、夏休み中は超稼ぎ時なのにどうしてくれぬ…つ。  
机に沈没しながら必死で頭の中で計算を繰り返す凛には、声を掛けられたことすら気が付かない。

声の主に気づいた雅人は、触らぬ神に祟りナシ…いや、この場合は人の恋路を邪魔するヤツは…つというわけで、そろそろと教室から出て行つた。

同様に、同じクラスの連中も、好奇心ネコをも殺すということを承知しているようで、興味はあれど雅人と共にこつそりと部屋から出て行つた。

そんな雅人や周囲の行動すらも気に掛けず、ひたすら云々と唸つてると不意に頭を撫<sup>な</sup>でられる感触がした。

「何だよつ、俺は今、人生最大のピンチの真つ只中にいるんだつ。  
お氣楽極楽、お坊ちやまで顔が良くてチョーシが良くてついでに頭も良いなんて詐欺師なお前とは違うんだよ〜〜つつ…!」

乗せられた手をパシリと払い除けて恨み言を重ねる。

ああ、本当にこれからどうしよつ。

凛の中ではすでに追試すらも赤点を取り、せっかくの夏休み中に学校で補講を受けて教師に説教されている図が完成している。

お昼<sup>ゴ</sup>ハンは基本的にバイト代で賄<sup>まかな</sup>つている凛にとって、バイト代が減る=食事が減るという方程式が出来上がつているのだ。  
たかがテストで赤点を取つてしまつたがために飢え死になんて…つ…

育ち盛りな上に大食いな凛にとって、もはやこれは死活問題なのである。

他人が必死であれこれ考えている最中だというのに、  
人の髪を弄<sup>もてあそ</sup>んでくる指先がうざつた。  
人がこんなに真剣に悩んでいるつていうのに…！  
なお

「だあつーもう、お前のせいだつ。だからこの俺に昼飯奢りやがれつー。」

いたずら  
悪戯を繰り返す指を掴んで、凛は雅人を睨みつけた。

」  
.....」

しかし、いるはずの雅人は既にそこにはいなく、代わりに二コ二コと爽やかに微笑む甘い顔立ちの青年がそこにいた。

「妬けちゃうなあ。九条のこと、『お前』なんて呼んじゃうんだ？」  
それじゃあ、僕のことももちろん、紅つて呼んでくれるよね

「ああ、淡海だけじゃ不公平だよね？もちろん、喜んで僕もキーワードを貰つて呼ぶね」

卷之三

でつ  
！」

「なんでアンタがいんだよ-----」

目の前でキラキラと輝くオーラを振り撒きながら極上の笑みを浮かべる鷹司に、凛は掴んでいた手を乱暴に振り払つた。

なんでなんでなんだつて「イツ」が2年の教室にいんだよーー?いやいや、この際それはもうどうでもいい。

それよりも切実なのが、振り払ったハズの指先が自分のそれと絡め取るようにな重ねていことだ！

触れた指を撫でるように絡ませていく鷹司の行動に、凛の思考回路はパニック寸前だった。

「否、既に考えることを放棄してしまった。」

考えるよりも先に手が出る凛は、動物的本能により空いていた片手で鷹司の方を押し退けて距離を取る。

思いのほか簡単に拘束が解かれ、ようやく一息吐いた凛は詠しむように鷹司を見上げた。

「何なにナニ！？センパイっ、いつたいどうしてなんだってこんな口にいるんですかっ！？」

「まあまあ、凛。落ち着いて？それに、紅って呼んでくれる約束でしちう？」

「はああっ！？言つてません、してませんっ、俺は絶対そんな口といいませんっ！何かの間違いですよっ、白昼夢でも見たんですか！？ああ、そうですかお疲れなんですね。じゃあ俺なんかに構わざどころかのハーレムな連中でも捕まえてとつとと休んだほうがいいと思います！？とつ、俺にしては名案だつ。じゃ、そういうことで！？」

一気に捲<sup>まく</sup>し立てて脱<sup>だつ</sup>兎<sup>と</sup>の如くその場から去ろうとしたが、鷹司は凛の手首を捕らえ反動を利用してその身体を自分の方へと抱き寄せた。片腕を腰に巻きつかせて、逃さないようぎゅっと抱きすくめる。鷹司の胸に頭を押し付けられた凛は、真上から降り注ぐ視線に不覚にもどきりとしてしまった。

じつと見つめてくる鷹司の瞳。

色素の薄いグレーの瞳が、もどかしげに揺れていた。  
神に愛された作り物のような綺麗な顔立ち。

一見冷たく見えるその顔は、甘く人懐こい笑顔と柔らかく揺れる薄茶色の髪が彼の魅力を惹き立てていた。

それが、今は。

「どうしてそんなに僕を避ける?」

「……っ」

そっと耳元で零れるような吐息に乗せて囁く。  
切なげな表情が、凛の心を惑わせていた。

掴まれたままの手首が熱い。

鼓膜を震わせる甘い声が、優しく脳に侵入してきた。  
なんで。どうして。

今までただ、からかうようにしか接してこなかつたのに、どうして  
急にこんなことをするのだろう。

そして、振り払ってしまえばいいのに、どうして自分はただバカみ  
たいにコイツのことを見ているんだろう。

鷹司の空氣に飲まれて、凛は動くことが出来なかつた。

「あ……たりまえ、じゃないですか  
「なんで」  
「オトコの自分に、ヘンなこと言つてくる人を避けるのは、フツー  
だと思います」「ヘンなことって……」  
「ヘンなことって……」

少し不機嫌な声音を吐いて、鷹司が顔を近づけてくる。

あつと思つた時には、その薄い唇が凛のものと重なつていて。  
僅かに触れただけですぐに去つてしまつた感触が、何を指すのか理  
解したくなかった。

信じられないものを見るかのように瞳を大きく開かせて、ただその  
整つた造形を見つめていた。

「……っ」

「ちよつと意地悪…しあざわらひやつたかな

固まつたままの凜をそっと離して、その身体を自由にした。鷹司は名残惜しげな表情を一瞬だけ見せて、すぐにいつもの軽い顔に戻る。

「今度の補講、僕がやるんだ。そのお知らせに来ただけだよ。ちやんと参加してね」

何事も無かつたかのようにブレザーのポケットからプリントを取り出すと、凜の机の上に置いた。

未だ呆然と立ち尽くしている凜に、その声が届いているかは分からなかつたけれど、鷹司はそのまま教室から出て行ってしまった。一人残された凜は、鷹司が教室のドアを閉めるとともに、頭を抱えるように蹲つても混乱は治まらない。

「何なんだよ、もう…」

赤点にて、追試、バイト代減額によるお皿<sup>ヲ</sup>ハシ<sup>ノ</sup>に夏休み返上。

そして……キス。

「最後はせつてー俺のせいじゃねえ…」

人生史上最低で最悪な一日は、どうかこれで終わって欲しいと切実に願っていた。

## 第三話（後書き）

誤字・脱字がありましたら、ご報告いただけますと助かります。  
また、評価・感想などがありましたらお気軽にご要り致します！  
ちょー亀更新で申し訳ないのですが、頑張つていいかと思ひます。v  
よろしくお願ひ致します m(—\_—)m

シンと静まり返った教室の中で、落ち着いた声だけがたおやかに流れている。

ホワイトボードの前に姿勢良く立つた青年は、穏やかな笑顔をそのままに珍しく真面目な表情を覗かせていた。

凛は流麗な彼の顔を見ないようにして、ボードに書かれた内容と補講用に配られたプリントを食い入るように見つめていた。

(こっち来んなこっち来んなっ！ってゆーか俺を見るなツツ)

3日間の補講の後、再試験を実施して合格すれば見事無罪放免。しかし、凛にとつてはそれどころの状況ではなかつた。

「どじが分からぬ？」

優しげな聲音で自然に声を掛けてくる。  
けれどそれは上級生として、そして教える立場の者としての態度だつた。

先日までの親しげな(図々しいとも言つ...)空気は何処にもなく、  
その身に纏う雰囲気は、彼が本当に有能な生徒なのだと言つことを嫌というほど思い知らされる。

ただ綺麗なだけでは、この学院の生徒たちをまとめることが慕われる  
こともないのだと改めて実感させられた。

(ああもうホントやだ。何なんだよこの人…つ)

何でこの人は俺なんかに構うのだろう。

もっと可愛くて素直で、頭の良い人がこの学校にはたくさんいるのに。

凛は濡れたように流れる漆黒の髪をくしゃりと握りしめた。

『お前にはこの黒髪が良くなつた』と、あの人気がよく褒めてくれた。

大きな手でからかうように撫でてくれていたっけ。

そんな断片的なものは時折思い出せるのに、肝心なことが何一つ思い出せなかつた。

鷹司の態度も核心を突くようなことは何一つしていない。

ウソのような甘い言葉と、事故のような…キス。

だからこそ苛立つてしまふ。

まるで自分を、嘲笑つあざわらていてるかのようだ。

「いえ…大丈夫、です…」

少し不機嫌な様子で答えた凜に、彼はそれ以上追求してこなかつた。

「やつぱりダメだつた…」

職員室前でがつくりと頃垂うなだれた凜の手には、『不合格』の通達のプリントがあつた。

朝、担任から呼び出されてまさかと思つたが、案の定な結果だつたのだ。

彼の授業はとても分かりやすかつた…ように記憶しているが、如何せん、彼の動向が気になつて気になつて仕方がなく、ろくに頭に入つていなかつた。

「も～ヤダ…」

マジ自分探ししてゐる場合じやねえ…。

凜は思わず頭を抱えてしゃがみ込んでしまつた。

「はあ……」

このままでは押し迫る現実に負けてしまつ。

不合格者には（と言つても凜しかいない）生徒会室でお説教ならぬ、特別講習がある…らしい。

担任から笑われながら渡されたプリントには、テスト結果と今日の放課後に生徒会室に来るよう」としか記述されていない。生徒会室と言えば、例のちょっと妖しげな生徒会長と、最近の悩みのタネの元凶である鷹司<sup>あや</sup>がいるではないか！

ああ、行きたくない。

このまま逃亡しちまおつかなあ～なんて誘惑に駆られるけれど、サボつたが為に後日バイトする時間をもつと削られるのはマズイ。潔くササッと行つてとつと怒られて逃亡<sup>うなづけん</sup>するか、このままエスケープしちまつか。

両者のメリット・デメリットを考えながら云々と天秤が揺れる。こんなに一所懸命に考えるくらいなら、最初から真面目に勉強していれば良かつた。

今更そんなことを思つても、後の祭りなのだが。

そう思わずにはいられないのが人間の性<sup>サガ</sup>つてヤツなのかもしれない。

「ま、いいや。後悔してたつて仕方ないし」

フンっと思つ切り良く立ち上ると、諦めて最後の審判へと進むことにした。

お説教だけなら、お昼ごはんは食べれるし、今まで通りあの人を探<sup>さぐ</sup>れる。

もしも夏休み返上で補講なら…

その時考えよう。

とにかく今は、何が何でも口を突破して、冬の自分の誕生日までには思い出さなくてはならないのだ。

ここで無駄に考へている時間のほうがもつたいない。

そう思い直すことにした、凛は生徒会室へと向かつた。

二二〇。

近頃いろいろと疲れていたこともあつてか、少し投げやりな気持ちになりながら凜は軽くノックをした。

豪奢な扉の奥からは、明るい声が聞こえる。

גַּדְעָן

軽い調子はどこかあの男に似ているが、声が全く違う。

卷之二

生徒会は女生徒ばかり居たのだ。  
そんなことを不思議に思いながらも、凜は警戒するより仕事に集中していく。

「失礼しま  
す！？」

わあああああー!!!! ホントに凛ちゃん、凛ちゃん凛ちゃん

「まつ!?

扉を開けると共に奇妙な言葉を発して突撃してきたモノとぶつかる。

街を遠しがった中の離れたところから、いのちの葉を夢中で騒ぎ並べ立て、小柄な凛よりもさらに小さな身体に似つかわしくない怪力でぎゅうぎゅうと抱きしめてくる。

息苦しさに喘ぐけれど、少年は凜の様子などまったくお構いなしで、  
その馬鹿力で猶も凜に抱きついていた。

「……………ああ、何なんだ、よつー!?」

「クンクン……はあ～～～つ、」これが待ちに待つ憧れの凛ちゃんの匂いなんだね。あ、あ、むづ、ツツコして食べぢやないかい

たいくらいたよお～～～うつ～～ホント、魅惑的で「ナンジャラス、

それでいて甘美な香りなんだろつ～～！」

「なつ、何意味分かんねえ」と言つてんだよーとあえず俺から離

れ…「うぐあつ～」

「り…ん、ホント、ずっと待つてたんだよ」

「ツツ～？」

それってどうこいつ…？

少年の発した言葉が気になつて、苦しいのも構わず彼を見つめてしまう。

憂いを帯びたその表情は、少年という年齢よりもずっと大人びたような表情をしていた。

しかし、急に元の子供のように顔を膨らませて不機嫌そうになる。それと同時に、圧迫されていた身体が解放されるのを感じた。

「待つっていたのはお前ではなく、私だ」

「うつつきやああつ～？なつにすんのさ英クン～！」

「…ふう、お前は留守番もうく」出来ないのか…。後で紅に苦情を出して置かねばならぬな

「ひええええッ～！？」やめてやめて、それだけはお願ひ勘弁してツツ。こんなに可愛いボクを虐めるなんて何てヒドイ男なんだよ英クンはつ～！この鬼つ～鬼畜つ～むつりスケベの人でなしいい～～～つ～～～！」

「何だと？お前の主の方がよっぽどむつりスケベの人で無しではないか。そこまで言づのなら、お前はよほど私に仕置きされたいらしいな

「いいいこぎやあああああああ～～～つ～～？」

目の前で繰り広げられる展開に思考が付いていかない。

とりあえず、華園が自分を助けてくれたのだということはかるうじ

て分かつた。

何故なら今現在も、突撃してきた少年の首根つゝを掴んで片手でぶら下げているからだ。

(会長つて…力持ちだつたんだ……)

なんてトンチンカンなことを真つ先に思う程度には混乱しているらしい。

断末魔のような悲鳴が部屋の中を木靈こだましていたが、華園が少年を部屋の奥の扉へと放り投げ、少し経つとやがて声が鳴り止んだ。

「ふう…まつたく誰に似たんだか、煩くて敵わない」

部屋から出でたのは華園だけで、手をパンパンと叩くとようやく思い出したかのようにこちらへと向き直った。

「お待たせ、凛。」ひづちへおいで。お茶でも入れてあげよう  
「えつ！？あつ…、ハイ」

何事も無かつたかのように麗しい笑みだけを浮かべて凛をソファへと促すと、華園は備え付きの簡易キッチンの方へと向かった。

「うわ…ふかふか」

上質な皮張りのソファに腰を下ろすとゆっくりと身体が沈んでいく。その少し落ち着かない感触と戯れないと、やがてキッチンの方から食欲をそそる良い匂いが漂ってきた。

(ああ…そういうえば、収入激減を想定して今日はお食べてないんだった…)

ぐぐぐ～～とお腹の虫が血口主張をしてくる。

あんまりにも鳴るものだから華園に聞こえやしないかとちょっと心配になってしまった。

(アイツといてもそんなこと考えたりしないのに…)

いやいや、そんな状況に陥ることを想像するほうがもつとイヤだ。でもどうして会長の前では恥ずかしくないようにしてたって思つるだろう?

学院一の人気を誇り、さらには学内トップの頭脳と家柄、そして自身の圧倒的な存在感を併せ持つ『一般庶民ナメてんじゃねーよ』的な人間がいたら妬みやつかみ反感を買いつるようなものなのに、ことこの華園英に関してはそれが全くない。

いかにもなセレブ嫌いの凛も、何故だか彼のことは好印象である。先日のことを抜きにしたとしても。

すっげー金持ちだし美形だけど自分にはあまり関係ないから嫌いではない、と思うこと事態が、既に彼を特別視しているように思えた。そんなことをぼんやりと考えていると、やがてトレーを持った華園が音もなく静かにこちらへと歩いて来ていた。

「凛? どうした。今日は少し暑いからアイスティーを入れてみたんだが、紅茶は飲めるか?」

「えつ、あ、ハイ。ありがと」「やります…」

会長と紅茶つて、何か似合わないよな…。

なんて、ストローの刺さったグラスを受け取りながらふと思つ。クールな印象の華園は、何となく夏でもホットコーヒーをブラックで飲んでいるようなイメージだった。

慣れた手付きでポーチュンとガムシロップが入った小さなカゴまで用意しているのを見ると、こういったことは日常茶飯事にしているのだというのが分かる。

「腹は減つてないか? スコーンを焼いたんだが、良かつたら遠慮なく食してくれ」

「本当ですかっ! ?」

実はめっちゃお腹空いてたんです…と洩らすと、華園はもう一度キツチンの方へと向かい、今度は軽食まで作ってくれた。

凛は、どうして自分はこの部屋へ来たのかすらも忘れて、美味しい食事と華園との刺激的な話でしばらくの間楽しんでいた。

「つていうかいい加減！」から出してええええええええ～～！！

少年の嘆きが聞こえてくるまで、一人はすっかりとその存在を忘れていたのだった。

## 第四話（後書き）

物凄いカメ更新で申し訳ないです…。  
それでもお付き合いくださっている方、本当にありがとうございます!!

ああ、それにしてもファンタジー要素が出てくるまでの前フリが長すぎます…。orz

## 第五話

新月の夜、静かに3つの影が闇に墮ちてゐる。

僅かな星の光に照らされた者達は、人目を忍ぶよつてそつとその場に舞い降りていた。

そのうちの一つがそつと片手を伸ばして大木に触ると、新緑の葉が鮮やかな朱色の花びらに染め変えられる。

夜風に揺られて流れる銀の髪と、闇に浮かぶ一いつの瞳。オシャタケイ

この世のものではない美しさに、一つの存在は支配されていた。

「IJのままで、本当に……いいんですか…？」

「…………」

「貴方うりじくもない。ずっと…IJの時を、待ち望んでいたではないか」

一つの存在に、その者は答えない。

支配する者はそつと瞳を伏せると、悲しげに微笑みを浮かべてみせた。

「あの約束は…果たされではならぬのだ」

鼓膜を震わす美声と零した吐息は、やがて溶けるように闇夜の中に消えていった。

\* \* \* \* \*

「じょーもーつ、生徒会書記のつ、四柳院叶芽クンでーすつー！」

！」

因みにこいつ見えても3年生だよつ、と先ほどから異様なほどテンションの高い少年が部屋から出されるなりいきなり自己紹介を始めやがつた。

俺はといふと、天使みたいな顔をした少年の姿と中身のギャップの激しさに呆気に取られ、会長が隣にいるのも構わずにポカンと見つめてしまった。

（な…何なんだよ、コイツ…）

ふわふわと波打つ金色に近いクルクルの髪。

大きな碧い瞳が可愛らしい顔に良く似合つているが、無駄に高いテンションと奇妙な行動が全てを台無しにしていた。

「生徒会つて…顔で選んでるんだつけ…？」

いやいやそんなバカな。

仮にも天下の桜華学院。

みてくれだけでどうにかなるような場所じゃない。

しかしながら、さつきから人の身体を好き勝手にぺたぺたと触つてくる四柳院に、俺はソファに座つたまま会長を盾にして匿つてもらつていた。

会長はと言つと、そんな俺の様子を楽しげに見守つている。

（あのお…見てないで、ちょっとは俺を助けて欲しいんですけど…）

とりあえず壁になつてくれてるので良しとしておひづ。

あまり多くを望むのは何事も良くないしな。

俺は天使のような小悪魔……いや、この場合はじゅじゅ馬天使<sup>エンジェル</sup>?を適当にあしらいうながら、この部屋に入る前から気になつていたことを会長に聞いた。

「あの…会長、俺…やっぱり補習ですか?」

「うん？なんのことだ？」

「いや、だからその…この間の追試、ダメだったから…。それで俺、呼び出されたんですね？」

「ああ、そのことか。凛は元々賢いんだ。どうせ今回だって、紅のヤツがキミの邪魔をしたんだろう？」

「いえいえ、とんでもないですっ！何だつてそんなこと…」

確かに鷹司が講師だつたから集中力を欠いていたかも知れないけど、俺が賢いなんてとんだ大間違いだつ！

天才が「うじやうじや」いる中でも平然とした顔でトップを取るような人とは元から頭の出来が違うのだ。

一緒に居ることさえ恐れ多いのに、「賢い」なんてありえないいつつ

俺は心中で超絶叫びまくっていたが、華園にはちつとも届いていない。

「分かつていいよ」と優しく頭を撫でられて、クールな容姿を少しだけ柔らかくする。

（うわ…つ、めっちゃ貴重なモノを見てしまった…つ…）

一瞬の出来事に俺が驚いていると、華園はすぐに元の冷たい表情に戻してすつと立ち上がり、シカトしまくっていた四柳院の首根っこを掴んだ。

「うひやああっ、何すんだよ～英クンッ」

「少しほ静かに返事が出来ないのか、お前は。いいからアイツを呼んで来い」

「何でボクが…つ」

そんな体勢だつたら誰だつて文句を言つだらうに、会長は態度を変えたりはしない。

四柳院に悪気はないのだが、助けてやる義理もないので俺は傍観を

決め込んだ。

何でいうか…一瞬で、空氣が変わったような氣がしたから。

「行くよな、叶芽？でないと……」

「ひやつ、はいいいいい～つ

案の定、華園が四柳院の耳元で何かを言<sup>い</sup>うと（きっと何か<sup>おど</sup>齧<sup>く</sup>したに違<sup>ひ</sup>いない）、四柳院はそれこそ脱<sup>だつ</sup>兎<sup>いと</sup>の如<sup>いと</sup>く部屋から飛び出していった。

「さて。これで漸<sup>ゆき</sup>く邪魔者<sup>やくましゃ</sup>が居なくなつたな、凜<sup>りん</sup>」

「ふあいつ？」

扉が閉ると同時にこちらに振り返つた華園は、身体の芯から凍えるような不敵な笑みを浮かべていた。

「わあ、始めようか…」

## 第六話

拝啓、はいけい 天国にいるお祖母様。

お元気でいらっしゃいますか…？

お祖母様が俺にたくさん愛情を下さっていたことを、俺は今になつて身に沁みて実感しています。

だけど、『めんなさい』。

俺はもうすぐそちらへと旅立ちます。

こんなに穢けがれてしまつては、お祖母様に会えないかもしれません。

まだ十分に供養出来ていなかもしれないけど、不出来な孫を許して下さい……。

（俺の人生も、口くちまでか……。ああ、あの人との約束も果たせなかつた…）

凛は広い生徒会室という密室で、華園に追い立てられていた。他にも席はあるのにもかかわらず、ソファに腰を掛けている凛のすぐ傍にまで寄り添つて座り、先ほどから執拗しつとうなまでに攻め寄つてくる。

凛は逃げ出すことも出来ず、かと言つて助けを求めることが出来ず、ただ訴えられるがままに華園によつてもたらされるものを甘受かんじゆしていた。

「ほり…凛、可愛い手がお留守になつているぜ。もつとじつかりと動かさないと駄目だな」

「や…かいちよ…もう、無理です…」

「もう降参か？ まだまだイケるだら…？ それに英えいと呼べと、何度も教えたから分かるんだ」

「んつ……英センパ……『めんなさい』俺ちゃんとするから……だからもう……あつ」

華園の攻めは容赦ない。

少しでも早く終わってくれるように願うしかない凜は、現状の責め苦に耐えるしか他に術<sup>すべ</sup>がなかつた。

どれだけしても解放されない苦しみ。

華園ほど経験豊富な男なら、それくらい分かつてくれているハズなの。

「もう……ダメ……僕の凜に何やつてんだよえ―――――いッツ――！」  
「…………つ――？」

その時突然扉が豪快に開かれ、飛び出してきた鷹司が華園に向かって叫び散らした。ズカズカと部屋の中を横切ると、華園の隣に座つていた凜を横から奪い取る。

華園の悪手から守るようにぎゅっと抱きしめると、不機嫌な表情を隠そうともせずに華園を睨みつけていた。

「凜？ 大丈夫か……？ 英の野郎に何されたんだ。触られたとこ全部僕に教えるんだ！ 僕が全部消毒してあげるからね」

「えつ……？ は、ハイ？？」

「ねえ、何処……？ 首？ 胸？ お腹の辺り？ それとも……」

「なつ……ちょっと、アンタどこ触つてんですかつつ――――？」

確かめるように身体中をあちこち触れてくる鷹司の手。  
目元の辺りから頬、首筋、鎖骨の辺りへと徐々に降りてくる冷たい感触。

制服のシャツを捲<sup>まく</sup>つて腹の辺りにまで及ぶと、さすがに凜も焦<sup>あせ</sup>つた。  
心配そうな表情をしてくるくせに、言つてることとやつてることがま

るで違う。

かと言つて、誤解を解こうにも全く人の話を聞いてくれるような状況でもなかつた。

「ちょっと…センパイっ、止めてくださいっ。何へんな勘違いしてるんですか…」

「勘違い?じゃあ何、凛は合意の上で英なんかとしてたってわけ?僕が1年もずっと口説いてたって見向きもしなかつたくせに、英には簡単に許しちゃうんだ、凛は?」

「何ワケ分かんないコト言つてんですかっ。合意つて言うか…じゃなくちゃ俺、退学になっちゃうかもしれないし…仕方ないじやないですかっ」

「何だつて!英、お前いつからイタイケな少年を齎すよ!うな愚者に成り下がつたんだ!?」

「さあ…何のことかな」

「はあ!?!だから違うんですつてば!…」

「ダメ。僕の言うことを聞かない凛なんか知らない。いいから!」  
ちにおいて

「うわっ」

グイと凛の肩を引き寄せた強引に立ち上がらせた。

その時、ガタンとテーブルに凛の足が当たり傍そばにあつた書類がバラバラと大量に床に散らばってしまった。

「ああ――――――――――」

それを見た凛は驚愕きょうがくした。

この数時間の間に耐えてきたこと全てが、ほとんど無に帰きしてしまつたからだ。

「え？ 何ナニ？」

「あーあ……確実に嫌われたな、紅。ククツ、私としてはその方が良いのだがな」

「は？ え？ 何で僕が凛に嫌われなきゃなんないの？」

何のことやら全く状況を理解出来ない鷹司とそれをからかう華園。そんな一人のことなど最早視界にすら入っていない凛は、これまでの苦労を思つて泣けてきた。

しかしそれ以上に、己の努力を水の泡と化した鷹司への怒りが沸々と湧き上がつてくる。

「せっかく頑張つてやつたのに……俺の苦労が……つ、何で何だよ……なんでアンタはいつも俺の邪魔ばっかりすんだよ……つ。俺、アンタに何かしたのかよ？ 念願叶つてようやくココに入学出来たと思つたのに、登校初日から追い掛け回されるわ全校生徒の見世物パンダにされるわで散々だしつつ！」

「えっ、ちょっと、凛、待つ……」

「夏休みに補習をやらない代わりに資料整理やつてたつていうのにアンタが勘違いして滅茶苦茶にしちゃうし！ やつともうすぐ終わりそうだったのに、どうしてくれんだよッッ！――！」

切羽詰つた凛は敬語を使うことすらも忘れて鷹司に激昂<sup>げつこう</sup>していた。テーブルの上に乗せられていた大量の資料。

最早原型を留めていないほど無残に散らばってしまっている。

これは2学期に行う文化祭の予算案や模擬店の規定、安全面の考慮などといった様々な資料が取り揃えてあった。

凛はこの膨大な量の資料を読み、内容を理解した上で的確に仕分けていたのだ。

内容によって注意を促す対象違つからだ。

生徒側が気をつけなければならぬこと、学校側が考慮しなければ

ならないこと、またはその両方が互いに善処しなければならないことや要望事項などなど。

あまり賢い方ではない（と自分では思つてゐる）凛にとって、この作業は苦痛を極めていた。

どの観点から考えなくてはならないのか。

それと同時に考慮しなければならないことは何か。

付隨する項目はどれか。

普段、頭を使わないのに珍しくフル回転していたため、すでに思考回路は限界だったのだ。

でもそれももう少しで終わりだったハズなのに…。

「…………っ」

大きな黒い瞳にうつすらと光るもののが込み上げて来る。わなわなと震える唇を堪えて、ぎゅっと田の前の憎い男を睨み付けた。

「…………んたなんか……っ」

「り、ん…？」

「アンタなんか…っ、だいつきらいだ

！…」

ツツ…！！

本能のままに怒りをぶちまけると、凛はそのまま部屋を飛び出してしまった。

バタンッ！と激しく扉が開かれると共に消えていく凛。

戸惑う鷹司に、華園は軽蔑するような冷たい視線を送つていた。

「ククッ…泣きそつなあいつも美味そつなものだな」

「なつ、ダメだ！アレは僕のだ…！」

「まだお前のものにはなつてはいまい。むしろ、アレが私を選ぶ可

能性の方が高いと思うのだがな。それにお前は、諦めるのでは無かつたのか？」

「…っ、ホンシットお前つて嫌なヤツだな」

「お前が煮え切らないからだ」

ふっと楽しげな笑みを浮かべると、思い出したかのように開け放たれたままの扉に視線をやる。

すっと凛が去つていった廊下の奥を見つめると、今にも地団駄じだんたを踏みそうな顔をしている相方にさそやかな助言を送つた。

「早く追いかけなくていいのか？今頃きつと泣いているんだろうな…どつかの誰かが馬鹿な勘違いをしたせいで、せっかく私の扱きに耐えてこなした課題を無為にされてしまったのだから。泣き腫らした顔のあの子は特に可愛いんだろう。あの子を狙う獣けだものが、また増えるんだろうな」

まあもつとも、お前にはもう関係の無い話だったな…と続ける華園の言葉に、鷹司がぴくりと反応を示す。それでも何かに耐えるようにその場から動き出さない相方に、華園はさらに容赦なく言葉を浴びせていく。

「やはり…お前などにアレは勿体無い。元々は私の獲物だったのだ。幸い私はアレに好かれているしな…私が貰い受けるのが筋つてものだろう。私が優しく慰めてやれば、アレもすぐに私に身を委ねるであろうしな。それこそさつきお前が想像したようなことを、だ」

「く…っ、お前ぜつて一わざとだろ…」

「さあ…何のことだ？」

しつと涼しげに答える華園に、鷹司はますます苛立ちを覚えた。最初は見向きもしなかったくせに。

初めに目を付けたのは自分なのだ。それなのに、我が物顔である子の傍にいるこいつが許せない。

そして、自分よりもこいつといることを望む凜が何よりも憎らしかった。

「凜…………」

「仕事の邪魔だ。さっさと行つて来い」

「お前が呼び出したくせに」

「叶芽は？そっちに行かせたんだが」

「ウザかつたから埋めてきた。」

「またか…哀れな僕しもべだな」

「あいつが勝手に付いて来るだけだ」

「ふつ…嬉しいくせに。素直じやないな」

お前ほどじやない、と続けようと思つたが、冷ややかな瞳の奥に実は怒りの色が混じつていることに気が付いて止めた。  
これ以上怒らせるのは得策ではない。

「…出かけてくる

「ああ、そうしろ。土産も忘れるなよ」

「知るか」

ぶつきりぱうに言つ返すと、そのまま部屋を出て行つた。

華園はふうとため息を零して扉の向こうに消えていく相方を思つ。

「本当に…

不器用な人だ」

## 第七話（前書き）

もの遅く遅くなつてしまふ、申しまじれこません。

もう最悪だ……！

「」を受験する時と同じくらい必死で頑張ったのに、全てを無駄にされてしまった俺は絶望に打ちひしがれていた。

怒りと悲しみのあまり飛び出してしまったけれど、結局のところ行き着く場所はいつも桜の木の下だった。

幹の隙間に挟まるような形で座り込み、膝を抱えて零れ落ちてくる涙を隠す。

補習を免除されることによつて生活の心配をしなくて良くなる」とよりも、課題をこなしていくことの達成感の方が嬉しかった。

ただ今は単純に、努力した成果を無為にされてしまったことが悲しかった。

自分が今、この学院に来ていつしていることさえも嘲笑われているよつで……。

「何で俺は……何も出来ないんだよ……っく……」

あの人に会いたい。

いるかもどうかも分からぬ人を求めるなんて自分はどうかしていふつて分かつてゐるのに、それでも欲してしまつ心を止められなかつた。

…あの時と同じだ。

大切な思い出を失つてしまつた瞬間に感じた、どうしようもない寂しさ。

の人を失つて、記憶まで無くなつて……。

心の何処かが、いつも空虚に満ちていて不安だつた。

だからこそ、今出来ることを精一杯にやつてきたつもりだつた。

自業自得とは言え、ああやつて目の前で崩れ落ちていくものを見る

と途轍もなく堪らない気持ちになる。

最初から何もなかつたかのようにな。

何をしても、結局は無駄だと言われているよつで。

全ては泡のように弾けて消えてしまうよつな氣がして。

「う…うく……こんな事で……ひつく……泣いてる場合じや……ない、  
のに…」

それでも口の端から零れてしまつ鳴咽おえつを止められない。

後から後から止め処なく溢れてきてしまつ。

子供のように泣きじやくるなんてつて思つても、込み上げてくる意味不明な熱いモノをどうにかするなんてこと…出来なかつた。誰でも良い。

あの人でないなら誰でも同じなんだ。

少しでいいから…誰でも良いから、温もりが欲しい

「…」

そう切に願つた瞬間、その思いは叶つた。  
そつと背中に回された腕。

初めは驚いてびくりと身体を震わせてしまつたけれど、徐々にしつかりとしていく力強い抱擁に安心感を覚え、俺は強張つていた身体から力が抜けていくのを感じていた。

ゆつくりと頭を上げると、田の前には同じ色のタイを身に付けた制服が視界に入つてきた。

顔を見ようとさらに視線を上げようとしたら、胸元に引き寄せられて強く抱きしめられていた。

「あ…」

トクントクンと聞こえてくる鼓動。

服の上からでも感じる、温かい体温。

抱きしめられた腕の温もり。

まるで何かから守るように優しく抱くいたその人の匂いに、俺は何処かで既視感を覚えていた。

「あ…… も、と？」

そんなまさか、と思いながら小さく名前を呼ぶと、回された腕がぴくつと反応を示す。

確かめるよつにその胸に腕を伸ばすと、さりげなく強く抱きしめられた。

「大丈夫…… 僕がいるよ。お前は何も…… 不安に思つな

「でも俺…」

「いいから…… このまま大人しく抱きしめられてる」

そつと耳元で囁かれるテノール歌手のように涼やかな声。いつも聞き慣れているはずなのに、どこか甘さを含んだ音が優しく鼓膜をくすぐった。

俺はその胸にコシと頭を預けて、全てを雅人に委ねる様に甘えることにした。

今はただ… 何も考えないでいたかった。

「うん…」めん、雅人

「……」

雅人はそれには答えず、ぎゅっと抱きしめる腕に力を込めてきた。俺は子供みたいにその温もりに縋りついで、言われるままに雅人の胸に顔を埋めるのだった。

\* \* \* \* \*

「落ち着いたか？」

「ん…」

雅人はポンポンっとあやす様に俺の背中を叩いた。

どのくらい時間が経つたのだろう。

そんなに経っていないような気もするけれど、何時間も経つたような気もある。

俺はようやく気持ちが落ち着いてきて、そつと吐息を零した。見上げるようく様子を伺うと、雅人の態度はいつもとは全然違っていた。けどからかうようにニヤリと笑った顔はいつもと同じだった。

端整な顔立ちから時折見えるハ重歯が可愛いのにカッコイイ。

（ほんと、神様って不公平だよな…）

ちよつと恨めしく思いながら上田遣いについて睨んでしまつ。

「ん？ 何だよ？ 親友様に向かつてそういう顔するかあ？」

「いひやつ、にやにすんにやよつ」

「お前の可愛い顔を、もつと可愛くしてやつてんだよ…」のつ、ちつとは俺の苦労を思い知れつりゅうりゅう

「にやんだとましゃとのくせにいいいいい」

俺のほつぺたを引っ張りながらじやれてくる雅人に応戦。

つて、マジ痛いんだつての！ ちよつとは手加減しやがれつてんだつ！

普段は身長差でリーチが足りなくて負けるけど、今はかなりの超接近戦。

ヤツが顔なら俺は「コ」だ…！

「うひゅひゅひゅひゅひゅ、ちゅつ、おまつ…やめれ…つあはつ、あはははは…」

「うひゅしゃこつ、おみゅーにゃんかこだこのつ、にゃんでそんなデケーんだよ…つ、ひょつとほおりえに嘶じええーつつおりやおりやあああ〜〜！」

「顔が良くて頭が良くて金持ちでつて性格も良いなんてありえねえ！！！」

俺は日頃から感じていた理不尽な（八つ当たり上等的な）気持ちをぶつけるかの如く、雅人のわき腹をくすぐりまくった。

なんでなんでなんだつて俺の周りはこつも理不尽で不平等でヒイキに満ち溢れてんだツッ！！

身長だつて平均以下の167センチだし、顔もフツーだし頭に至つては再追試。

唯一誇れるのはこの新月の夜よりも真っ黒な髪くらいだ。

それも、オトコだからあんまり人に自慢出来たことじやない。個人的には気に入ってるからいいんだけど。

「おまつ、マジやめれつ…んな可愛い顔してつと襲うぞ…」

「はあ！？だから俺が可愛いとか言うな…！お前マジ頭どつかイカラでんのか！？眼科行け眼科！」

（…お前がそんなんだから苦労するんだよ）

「何か言つたか！？」

「いーえ？」

にこにこと満面の胡散臭そうな笑みを浮かべる親友に、何かわからんがムカつく。

ぜつてーこいつ、腹で何か考えてんな…。

俺はいぶかしむように雅人の顔を覗き込むと、不意に頬を抓んでいたま

た手がするりと後頭部の方へと寄せられる。

……？

「なに……？」

「いーや？ 何でも？」

「……嘘つけ。何か企んでんだろ？ お前がそいつって、胡散臭そうな笑いしてる時はいつもそうだ」

「うさんくさって……ヒドイなあ……俺は一応、キミの友人のつもりなんだけど？」

「こんな友達を持った覚えはないつ」

「ヒドッ！ 今のは傷ついた！ 本気で悲しくなったぞ俺は……！」

「ふふつ……」

意地の悪い気持ちになつた俺は、雅人にはいたずらを仕掛けようとヤツの耳元に顔を寄せて言つてやる。

「ばーか、友達じゃなくて、親友……なんだろ」

からかうように普段じや絶対言わない臭い台詞セリフを零すと、雅人は面白くよろこびに固まつた。

放心した顔でかちーんっと硬直するヤツを見るのはこれが始めてだ。  
：そんなに驚くようなことか？

自分でやっておいてなんだが、笑いを取るつもりだったのに。

「もしもーし、まーせーとークーン？」

ツンツンと顔を突いても何の反応もない。

ちえ、つまらん。

まあいいや。

とりあえず、ここつのおかげで何に悩んでいたのか忘れた。

時折、どうでもいい」とで凄く悲しくなったり、泣きたくなったりすることがある。

そんな時、落ち着くまで一人で泣いているのが通例だつたけど、今回は雅人のおかげですぐに入ッキリしたし、どこか安心した。

「ありがと、な

聞こえないようにそつと言つて、ぱちーんと雅人の頬にビンタをかましてやつた。

「んなつ…凜つ！？」

「いつまで呆けてんだよ、バーカツ。先に戻つてるからなつ」

恥ずかしさを誤魔化すために、そのまま雅人の傍から離れて飛び出す。

一先ず教室に戻ろうと、校舎の方へと駆け出した。

後ろから俺を呼ぶ声が聞こえてきたけど、そんなもんは無視だ無視。

「でも…マジ助かつた、かな」

「何が助かつたの？」

零した独り言に返事が返ってきてびくつとする。

不意に顔を上げると、そこには不機嫌な表情を露わにした王子が立つていた。

「ねえ、凛…。キミはいつたい、何を考えているの

そつと近寄つてくる絶世の美貌に、俺は背筋が凍るのを感じていた。(何で……怖いんだ)

一步ずつ距離が縮まるに連れて、今来た道を引き返したくなる。

無意識に一步後退すると、ますます向こうの機嫌が悪くなるのが分かつた。

「嘘つきは、魔女の始まり……なんだよ」

## 第八話（前書き）

流血表現有り。

苦手な方はご注意ください。

## 第八話

その昔、深い森の奥に一人の魔女が住んでいた。

魔女は漆黒の闇に溶け込むような真っ黒な髪と、燃えるような真紅の瞳を持つた女らしい。

しかし一度魔女に遭遇してしまったら、その者は呪い殺されてしまうという噂だつた。

村の住人は魔女を恐れ、滅多に森を訪れようとはしなかつた。村の食料のために森の入り口近くにある川の魚と、樹木に生る果物を取りに来るくらいであつた。

ある日、碇を破つて森の中を散策していた若者がいた。

若者はその村一番の働き者で、住民の誰からも慕われていた。

村長の娘と婚約をしていて、幸せな人生を歩むはずだったのだが……。

雨が激しく降る深夜、若者は死体で見つかった。

抵抗したような痕跡はなく、首筋に噛みつかれたような二つの傷と、胸には銀のナイフが突き立てられていた。

若者を愛するあまり激昂した村の娘は、その身体からナイフを抜き取り、森の奥へと駆け出す。

住民は必死に止めたが混乱とその娘の気迫に負けて、娘を止めることが出来なかつた。

「私のレインを返して……！」

魔女の小屋へと辿り着いた娘は、血塗られた銀のナイフを魔女へ向かって突きつけ叫んだ。

雨に濡れ、激しい風に晒され、愛する男を失った女のその姿はあまりにも酷い姿であった。

魔女はこの娘が若者の妻か、と乾いた声が心の中で零れ落ちる。

「レインか…その者がどうかしたのか」

「とほけないで…アンタが惑わして、殺したんでしょーう…」

「…つー?」

魔女は驚きを隠すことなく、娘に詰め寄った。

「どうこう」とじや。レインが…死んだとでも言つのか

「ふやけないで…アンタが殺つたくせに…彼が何をしたって  
いつの…！」

(「…といどじや…）

怒りと悲しみに飲み込まれた娘は、全ての感情をぶつけてきた。

血塗られた銀のナイフ。

か細い腕から振り下ろされたそれは、魔女の肩口へと突き刺さった。

「く…つ」

「呪つてやるわ…アンタなんか怖くないわよ。何故かしら?…どう  
して今まで、私たちはアンタなんかに怯えていたのかしら。こんな  
…ただのオンナなんかに…！」

高らかに笑い狂う娘に、魔女は呆れて吐息が零れる。  
何も分かつていない…。

娘が振り下ろした先は、自分の胸だというのに。

ナイフが刺さつたまま笑い続ける娘が憐れであつた。

しかし、自分も殺されるわけにはいかない理由のあつた魔女は、小  
屋を後にする。

娘を避けて扉を開け、振り続ける雨の中へと消えていく。

己の惨状に気が付いた娘は、消え行く魔女に呪いの言葉を吐き続け

ていた。

「呪つてやるわ…アンタのその髪も、瞳も…全部ぜんぶ、半分になつてしまえばいいのよ…私の一族が、絶対にアンタを許さないわ…！」

その声が枯れるまで、その命が消えるまで、娘は叫び続けていた…

「ねえねえ、そのあとはどうなつちゃったんだ？」

「魔女は命からがら生き延びて、お腹にいた子供と過ごしたそうだよ」

「ええ！それって…死んじやつたレインの子供？」

「あ…それはどうなのだろうな…真実は、魔女にしか分からぬ」

凛の頭を軽く撫で、御伽噺おとぎばなしはそこで終わりを迎える。

けれど凛には納得出来なくて、どうしても結末が知りたかった。

男はどうして死んでしまったのだろう？

消えた魔女は、その後どうなつてしまつたんだろう？

どうして娘は魔女を殺すことが出来なかつたのだろう？

に答えを求めるけれど、困つたように笑うだけで何も教え

てはくれない。

なんだ宥めるように諭されるけれど、やっぱり腑に落ちないので顔がむくれる凛に、その人は内緒だよ、と言つて教えてくれた。

「生まれたその子供は、娘に呪われて本当に半分の姿でこの世に生を受けたのだ。瞳は魔女の真紅の瞳と、男の碧い瞳。そして魔女の力の元となる漆黒の髪は、力を發揮する時だけ。それ以外の時は銀

の髪なのだ

だからその髪と瞳を持つ一族は、一日で呪われた種族なのだと分かるようになつてゐる。

そしてその一族は見つかり次第、娘の一族の者にその命を狙われ続ける運命なのだ。

そう悲しげに話すこの人に、凜はわけも分からず悲しくなつた。

「どうして、のろつたりなんかしたんだう。そんなことしても、死んじやつたひとはかえつてこないのに」

「それはお前がまだ、大切なものを手に入れていないからだ」

「たいせつな……もの？」

「そう……。誰かを犠牲にしても、誰かの命を奪つてでも欲しいものがあるとき、人というのはどこまでも傲慢になれるものなのだ」

「じゃあ、おれは……のためにご一まんになるつ。だつておれ、

がいちばんたいせつなんだもん！」

「……。くくっ、そうか……お前は私のために傲慢になれるというのか」

「あーまたばかにしたあ……。おれはいつだつてほんきなのに……」

「はいはい、そうだな……」

ぜつたい本氣にしてくれていない……。

ぶうーっと膨れて見せるが、余計に子供っぽい気がしてすぐに止めた。

「おれはそのキレーなカミも田もだいすきだから

「凜……？」

凜はその人の流れるよつと輝く銀の髪にそつと触れて、確かめるように手のひらに乗せる。

サラサラと零れ落ちていくその感触を確かめながら、不思議な色をした瞳を見つめる。

「おれは、たとえのろわれてたって、ずっとすきだよ……」

シユーラン

## 第九話

ヤバイ……。

何かは分からぬけれど、とにかくヤバイと本能が危険信号を発している。

目の前に立ちはだかる男は、ただ静かに俺を見下ろしていた。  
逃げ出したくなる程重苦しい雰囲気に飲み込まれそうになるけれど、背には壁が、顔の横には男の腕が置かれ、そこから抜け出す術を遮っていた。

(嘘……？ウソつて何だよ！？)

俺は嘘をついた覚えなんかないし、ましてや魔女なんかじゃない（つてゆーか男だし）。

この男が一体何を考えているのかわざとばかり分からない。  
そもそも、この男の性格というか……この男自身のことが、俺にはよく分からぬ。

へらへらと笑つて軽かつたり、急に真剣だつたり、どこかもの悲しげな表情だつたり……。

どれが本当なのだろう?

どんな人なのだろうか…… - - - - - 」の鷹司紅といつ男は。

「ねえ……黙つてると、襲つちやうよっ。」

「ツ！」

「その怯えた顔……可愛いよねえ……。でもむ……キミがどんなに可愛い顔をしたとしても、やっぱり許せないんだよね」

どこか達觀したように遠い目をするセンパイ。

からかうような言葉はいつもと同じなのに、圧倒的な存在感が異質な空気を生み出していた。

(怖い……)

俺は初めてこの男を怖いと感じていることに驚きを隠せなかつた。ふと、空いているもう片方の腕がこちらへと伸びてきて、俺はびくりと反射的に身体を竦ませてしまつた。

その反応がいけなかつたのか、センパイは瞳は怒つたまま口元だけニヤリと笑みを浮かべた。

「ね、取り消して？」

「…っ」

冷たい手のひらがそろりと頬を伝う。思わず視線を逸らすと、それを許さぬよう無理やり顔を向けてせられる。

恐る恐る見上げると、先ほどよりも近くなつたセンパイの綺麗な顔が視界に飛び込んでくる。

少し長めの前髪から覗く鋭い視線に、胸を貫かれそうだった。

「センパイ……やだ……」

「…何が？僕はまだ…何もしていないよ？」

今からするけどね…と続けられた言葉を認識した時には既に、首筋に濡れた感触がしていた。

ぴくっと肩を震わせると、今度はその反応を楽しむように舐めまわされる。

その濡れた水音と得体の知れない感覚から逃れたくて抵抗しようと思つのに、何故か全く身体が動かない。

「な…んで…っ」

「動いちやダメだよ。痛い目に遭つても知らないよ？」

「…っ」

ちりつと左の肩口に痛みを感じて身体が震える。

何で怒っているんだろ？…？

最初に怒っていたのは俺のはずなのに。

(あーもうやだ。意味分かんない)

半ば現実逃避に走ろうとするけれど、生々しい感触がそれを許してはくれない。

「ね…、取り消してくれるだけでいいんだよ？」

「やつ…なに、が…」

「酷い子だな…せつかくそれだけで許してあげるって言つてるのに

「いた…」

クスクスと笑いながら俺の首筋や胸元に口付けを落としてもてあそ玩ぶセンパイ。

思つように動かない俺の身体とワケのわからない感情に、俺はまた泣きそうになつていた。

(取り消す…つてなんだよ！？いつたい何を言えばいいんだよ…つ)触られた先からゾクゾクと湧き上がる未知の感覚に翻弄されながら、まるで出口のない迷路に彷徨さまよつているような気分だった。

右も左も逃げ道はなく、どれを選んでも正解が一つもない。選択肢すらもあるのか無いのか分からなくて、困惑だけが俺を取り巻いていた。

ぐるぐると思考を巡らしても答えは出ない。

それでも現実から逃れたくてあれこれと考えていると、不意に顔を上げたセンパイと視線が絡み合つた。

薄いグレーの瞳に光が差し込んで、一瞬だけ碧く見えた目。

そこに映る自分自身の顔はひどくうろたえたように見えて情けなかつた。

(何で俺なんだよ。俺がアンタに対して何をしたって言うんだよ…)

つ。思い通りにいかない俺なんかじゃなくて、もつと綺麗で可愛くて、素直でお似合いのヤツが男女問わずこの学校には存在するのに……（）

引っ込んでいたハズの水分がじんわりと浮き上がりてきて、俺は零れ落ちないようにそつと瞬きをした。

「んう……っ」

僅かに目を閉じた瞬間、抵抗する間もなく唇を塞がれた。

驚いて反射的に身体が逃げようとする右肩を掴まれて壁に押し付けられた。

（痛……っ）

思わず眉をしかめるけれどセンパイは止めてくれない。

「んつ……ふ……あつ、やめ……っ」

角度を変えて次第に深くなっていく口付け。

冷たいセンパイの唇が、自分のそれから体温を奪つてドンドンと熱くなつていく。

幾度も繰り返されるキスの嵐に飲み込まれそうだった。嫌なのに。

こんなのはやめて欲しいのに。

次第に生まれてくる苦しいだけじゃない感触。

それを認めたくなくて必死で心を否定する。

（違う……っ、こんなの……しらない……っ）

それでも痺れるほどきつく吸われると、じわあつとそこには広がる何かがあった。

嫌なのに抵抗しきれない。

体格差から絶対的負けるのは分かつていいけれど、そうじゃない。見えない何かが俺を縛つて動けなくしているみたいな感覚だつた。

「ん…可愛い、凛…くち、開けて?」

「いやだ…も、許し…は…あツ!」

息苦しさと込み上げてくる熱に頭がボーッとしてくる。

尚も俺を責め続けるセンパイの行為は、まるで俺に罰を下<sup>よこ</sup>しているようだった。

重なる唇を離そうと顔を捩ればいつの間にか背中に回された腕が髪を引っ張つて痛みを与えてくる。

引き摺られて顔が上向かされると、一瞬だけ呼吸を許されても塞がれた。

「いい子だから大人しくして?…じゃないと…もっと酷いことしたくなる」

「…っん!」

宥めるようにちゅっと優しく啄ばむと、無理に開かされた口腔に柔らかいものが侵入してきた。

俺の舌とセンパイのそれどが絡まりあって弄ばれる。

上顎のあたりを撫でるように舐められ、捕さえられた舌をきつく吸われると頭の奥まで犯されてるみたいにジンと痺れるような感覚がした。

ふわふわと揺れてるみたいな不思議な感じがする。

俺は「えられ続けるその感覚に身を委ね、されるがままにその甘い気持ち良さを受け入れてしまっていた。

「あ…っ、は……」

センパイにされるがまま繰り返される行為。

口の端からだらしなく零れ落ちる唾をペロリと舐め取ると、センパ

イはよつやく解放してくれる。

「んあ……っ」

もひ、終わり……?とねだるよう<sup>に</sup>思わずセンパイを見上げると、今までに無く優しい笑みを浮かべてくれた。

(どうしようつ…俺、頭がおかしくなつちまつたのかも)

キスだけで腰が砕けそうになるくらい感じてしまつてこるのはもう否定しようが無かった。

抱き寄せられた腕と押し付けられた背中の壁が無ければ、今にも崩れ落ちそうなくらいに足取りが危ういのが自分でも分かる。

「凜…」

耳たぶを甘噛みされながら少し低い声が鼓膜をくすぐつてくる。不覚にもその吐息にすら感じて、心臓が壊れそつなくらいバクバク鳴っていた。

(つるさこつるさこつ…静まれ心臓つ田を覚ませ俺!…)

ぎゅっと田をつぶつて言い聞かせるけれど、身体はバカみたいにセンパイの言になりだつた。

「田…開けて?」

さらりと前髪を撫でられると、閉じていた瞼にそつとキスが落とされる。

指先で真つ黒な髪に触れられると、それだけでうつとつとしてしまいそうな自分に驚きを隠せなかつた。

「……っ」

意を決してゆっくりと目を開けると、情事のせいが普段より一層色っぽく見えるセンパイがいた。

(く…っ、絶える俺、センパイ菌になんか負けるなッ)

今の彼は、何かしらと言われたら素直に従ってしまう。そのままでやかなフローロモンが垂れ流し状態だった。

きつとこいつやって、今までハーレムを作ってきたのかと思うとなんだか無性に腹が立つてくる。

ヤツの思い通りになんかなりたくない。

その他大勢と同じだなんて真っ平ゴメンだった。

だからもう、解放して欲しい。

潤む瞳でやるく睨むと、センパイは一瞬だけ目を見開いたよつな気がした。

「あんまり僕を挑発すると、後で後悔するよ~」

「…? ?」

意味が分からん。

俺が『何言つてんのアンタ』って顔をすると、センパイは少し困ったような…それでいて楽しげな声で何か言つてくる。

「無自覚でそれやつてこらんどしたら…凛は相当なタラシだね」

「んな…つー」

タラシはアンタだろ…と思わず叫びそうになるがぐっと堪えて言葉を飲み込む。

(何だつて俺がたらしなんだよつ。意味わかんねえ…いや、この男の行動やら発言の意味が分かつたことなんか一度だつてないんだけどつ)

ファーストキスはすでに経験済みとは言え、あんな濃いのは初めてだ。

ああ……なんだつてこんな口トコト。

あろーことか俺は…感じちゃつたりなんかしちゃつてるしー。  
(いやいや、あんなのは氣のせいだ！でなけりやコイツが異常に上  
手いとか…そうだ、そうに決まつている！！あんなにいつぱいハー  
レムがいるんだからこなしてる数だつて半端ないハズだしつー)  
俺は心の中で必死に自分に言い訳をする。

そうじやなくちゃあの人に申し訳が立たない。

俺にとつて大切なのは……………

あの人だけなのだ。

「ね、凛…英なんかよりも僕の方がずっとヨカッたでしょ」  
「

「は？」

「イヤだな、照れなくとも良いんだよ？」

「…………いや、照れてませんけど」

「正直に言つていいいんだよ？英には内緒にしてあげるから。あいつ  
はどーせ、甘い嘘うそ言を吐きながら軽くキスしただけなんでしょう？」  
「

「

何言つてんデスカ、コイツ。

殴つてもいいですか…？

うん、殴つてもいいと思う。つか殴る権利は俺にはあるつ、ぜつ  
てーある…！

コイツはもしかして、ぐだらない勘違いで会長に張り合つてこんな  
コトしやがったのか！？

そなのがー？つづーかそりじゃなくちゃ納得出来ないし理解出来  
ない！

『取り消して』の意味もよく分からんけどそんなどーしよー  
もない理由に違ひない。

急に我に返つた俺は腹のそこからムカムカと苛立ちを覚え、怖さも  
何もどこかへ行つてしまつた。

そんなくつだらない」と唇を奪われた（しかも感じひやつた）俺はどーすりやいいんだよ！？

ああ、今すぐにでも穴掘つて埋まりたい…。

俺は濡れた唇を袖でグイと拭うと、そのまま拘束の緩んだヤツの左腕を払い退ける。

「…！」

「俺は、アンタも会長もどーでも良いんだよっ！遊びなら他でやつてくれ。俺はアンタらになんか構つてる余裕もヒマもねえんだよ！」

「！」

キツと睨みつけるとびっくりしたようなアホ面を浮かべたセンパイを尻目に、俺は走り出す。

（ああもー付き合つてらんねえ！！）

最初から付き合つているつもりもないけど、もう自分には関わらないで欲しい。

そんなことは、もつと時間もお金もあって、会長やセンパイを好きなやつらがやればいいことなのだ。

何も自分である必要なんかどこにも無かつた。

なんだかヤケにムカついた俺は、後ろを振り返りもせずに教室へと戻つていく。

「ああーもっヤダーネコー…！」

一際大きな独り言は、空しくも人気のない校舎裏へと響いていったのだった…。

## 第十話（前書き）

短めです。

全てが暗闇に閉ざされていた彼を救つてくれたのは、小さな手だった。

深い闇と孤独に包まれ、常に生死の境を彷徨ついていた彼に差し出されたひとつ<sup>もろ</sup>の光。

淡くて脆く、あまりにも頼りないその輝きは、その夢<sup>さむよ</sup>とは裏腹にとても温かなものであった。

決してることの無かつたその柔らかい光と温度<sup>かて</sup>。彼にとって、人など自らが生き延びるための糧<sup>さま</sup>でしかなかつたはづなのに。

皮肉にも、その手は光であると同時に口を切り裂く刃でもあった。

呪われた血を受け継ぐ彼は、人の生氣を攝取しなければ生きられぬ身体であった。

本来、彼らの一族は不老不死に近い長命な種族であり、他者に頼らなくともその強い生命力だけで生存し、美麗な姿を保つことが出来る。

一族によつては多少は異なるが、基本的には同族同士で繁殖を繰り返し、その稀なる血族を守りながら繁栄してきた。

絶対個数<sup>デメリット</sup>があまり増えないのは長命であるがために子<sup>サマ</sup>が出来にくいういう弊害があるからだ。

それゆえ、異種間の交わりを強く禁じていた。

しかし長い歴史の中で撃を破つたものが過去に2度、いずれも同じ一族の者であった。

一度目は永久に一族の屋敷内で幽閉とされ人間の記憶を消すことでも不問とした。二度目は両者とも消滅させることで、一度とこのような惨事が起きぬよう処置が行われていた。

しかし、半分だけとは言え絶対的な力を持つた魔女の子は、種族の

中でも歴史が長く高位の一族もあり、その絶大な能力と権力を惜しまれて生き延びることを許されていた。

通常の半分ほどしか生きることを許されていない彼は、暗い牢とも言える屋敷の中で一人…ただそこに存在しているだけであった。

常に監視者に見張られ、ろくな自由もない虚無の時間。

己を知るものなどほとんどなく、無意味に長い空虚な時間をただ流れのままに過ごし、いずれは消え行く存在であると彼自身何の疑いもなく当たり前のように受け止めていた。

それなのに。

「なぜなのだ……」

知つてしまつた光。きぼう

知らぬのなら、知らない今までいたかったのに。

この世界に生を受けてから一度も動くことの無かつた心を狂わすその存在を、幾度消してしまいたいと願つたことか。

そして運命のままに己の存在が消滅してしまえばいいと、どれほど想つたことか。

忘れたままでいて欲しいと願いながら、心のどこかで己を求めて欲しいという矛盾。

妖あやかしである己がそのようなことを想うこと 자체、間違つていると彼自身分かりきついていることなのに、それでも止めることなど出来ようはずもなかつた。

「なぜ、思い出すとするのだ…」

やめてくれ、と小さく零した言葉は、闇の中へとあっけなく消え去つていいく。

強大な暗黒の前では、ほんの小さな灯あかりなど簡単に飲み込まれてしまうのに。

それでも捨て去り切れない深い想い。

己を求めるその声に、幾度慰められたことか彼自身知る由も無かつた。

ただ、本能のままに人を食らう獣のままでいたかった。

そうすれば…己が醜いことにさえ、気づくこともなかつたのに…

「約束は、決して果たされてはならぬのだ…」

刻々と迫り来る死神の足音。

もうすぐ時を終わらせる大鎌は振り下ろされる。

その瞬間ときが訪れるまでは、どうか

## 第十一話（前書き）

久々の更新の上、真冬なのに真夏の話……。  
それってどうなのさ？と思いつつ、華麗にスルーしていただけた  
助かります。

## 第十一話

気がついたらもう夏休み。

夏だ！海だ！リゾートバイトだッ！

年に一度しかない貴重な長期休暇！

こりあもう、稼ぐしかないだろっ！！

今年は何がいいかな…。

煌く太陽の光をガンガン浴びながら海の家で接客？

それとも涼を求めてやつてくる避暑地のホテルで給仕？

遊園地のプールで監視員とかなんかもやつてみたいなあ…。

やっぱ交通費が掛かるのは嫌だし。

んー、やっぱ地元で探すかな。

常時入れている居酒屋のバイトも時給はいいんだけど、時間が短いからなあ。

朝から出来るヤツで、時間に融通利くのがいいなあ。

出来ればまかない付きで、交通費は支給されるかチャリで行ける場所で、時給がそこそこイイやつ！

「ねえねえ、凛ちゃん、次はコレやつでねつ

「…………」

つてぬわあんで俺は生徒会室で文化祭の準備をやつてるんじやああ

ああー！

ようやく減ったと思っていたところに渡ってしまったのは、これまた大量の資料の山。

しかも会計付き。

俺、数学はあんまり得意じゃないんですけど。

お金の計算は別だけどなー！

ちらと中身を見ると、予算案の計算とその項目内容のチェック……

それが本当に妥当かどうかの確認を金銭感覚のトチ狂つた金持ちブ

ラザーズ（会長＆副会長）じゃなくて、ザ・庶民派である俺に回す

なんて……

四柳院のヤツ、おそるべし。

仮にも会計担当だったんだな。と妙に納得してしまった（書記と会計は兼任だそーな）。

いや、一応はセンパイである人を呼び捨て＆タメ口ってどうよ？と思わなくもないが、なんかもうそんな気が失せるくらいムカつくから気にしない。

いつまでたつても『ちゃん』付けしやがるし、止めろって言つても止める気配がまるでない（ってゆーか聞く気がない）ので、こっちもそれなりの態度になってしまふのだ。

その上腹立つ程アホらしい項目がある！

「センパイ、何なんですかこの『交遊費』ってのは…アンタが遊びたいだけなんだろ？、こんなバカなもんは認められません！しかも何すかこの金額！！ ネズミーランドでも半日貸切るつもりですか！！ そんなバカなこと考えてる暇があつたらとっとと学院長からハンド貰つてきてください……！」

「ええ、だつてみんなと仲良くなついたほうが、イロイロ便利でしょう？」

「んなもんは勝手に個人的にやつてください… 予算なんか出さなくとも、アンタと遊びたがる暇人はそこらにいっぱいいるんですけどらつ。しかもセンパイ、金持ちなんだからわざわざ貴重な予算使わなくてもいいじゃないですか！」

「だつて、他人の金を使うのつて楽しいじゃん？」

「…………」

「わつ、ゴメンそんな怒らないでよ。しうがないなあ…じゃあ、公式的な名目があれば良いよね？ 何か全員が参加出来るようなイ

ベントとかさつ 「

「…まあ、それならいいんですけど」

「じゃーホテルでも貸し切つて…「予算はこれの1／2000しか出せません。わかつたらサッサと院長室行って来てください」……ハイ」

俺は思いつきり睨みつけて静かに指示すると、センパイは大人しく渡された書類を持って行った。

まったく、本当に手が掛かる人だな。

センパイとはアレ以来、普通の先輩・後輩の関係を続けている。こちらが戸惑つている暇など『えてなどくれないほど、至つて普通に接してきたからだ。

夏休みに入つて、結局補講の代わり生徒会の手伝いをさせられるから毎日顔を合わせなくちゃいけないし、俺だけ動搖してゐるのもなんだか悔しいからアノことは知らない振りをすることに決めた。生徒会の手伝いと言つても拘束時間は思つていたよりも多くないし、よっぽどの機密事項は知らされないから専ら雑用ばかりやつている。それに何より会長お手製のお皿ご飯付きつてのがかなり嬉しい！（これがまたちょ一美味い）

急なバイトが入れば休ませてもらえるし、新しいことを覚えられるしで結構楽しんでやつていて。

特に金の計算については…そんじょそこらの主婦よりウルサイんだぜ、俺。

悟られぬよう普通に作業しているように気をつけてはいるものの、四柳院にはしつかりバレていたみたいだ。

さつきからそ知らぬ顔で会計の仕事ばっか回してきやがる。認められていくよう嬉しそうな、見透かされて悔しそうな…でもやっぱ何かムカつく。

俺は予算案と勘定科目を見比べつつ、つい四柳院を睨んでしまつ。当の四柳院はとくに、俺の様子には全く気づかずにニコニコと笑

いながら過去の議事録と最近の議会の内容を確認していた。

くうくつ、ノンキにへラへラしてんじゃねえーーーっ！！

逆毛の立った猫みたいに苛立ちを隠さずこいると、ふいに頭の上をポンと撫でられた。

「…」

「凜…少し疲れたろ？お茶にでもしようか

「英センパイ…」

さらりと宥める様に俺の頭を撫でるセンパイの手が優しい。

俺はうつとりとその手に委ねて、大人しくセンパイの声に従つた。

何か、いつもそうなんだよな…英センパイつて。

俺が腹が減つたりイライラしてたり不安になつたりしていると、不思議と分かつちゃうみたいだ。

すぐに俺に声を掛けて来てくれて、やんわりと穂やかにこなさせてくれる。

自分が短気なのは分かつてているけど、どうしても治せないんだよあ

…。

「英センパイ、ありがとうございます」

ちょっとでも感謝の気持ちが伝わるように笑つてみせると、英センパイは満足げに微笑みを返してくれた。

やつた、またラッキーなもん見ちゃつたな。

英センパイは仕事中は無表情か静かに怒つていることが多い。

まあ怒らせてる原因は…あの一人しかいないんだけどね。

他の委員会のヤツらが来ても常に冷静にしてるし、ここにいるメンバー以外の人間がいたらまず表情が窺えない。

だから、俺にまで笑顔を見せてくれるっていうのは、それなりに気を許してもらえているような気がして単純に嬉しい。

英センパイとソファに並んで座つて、ゆっくりとお茶を楽しんでいた。ガチャリと扉が開いた。

「ああーズルイ。何一人だけいちやいちやしてんのー? 僕がこよーんなに頑張つて働いてるつてゆーのに!」

学院長室から戻つてきたセンパイが開口一番に不満を口にする。誰が働いてるつて!?

ショッちゅう隙をみてはどこかへ遊びに消えていくクセに!..

ムカつときた俺に気が付いたのか、英センパイは俺の頭を抱き寄せて冷ややかにヤツに視線を向ける。

「ほお…誰が頑張つているつて…? それじゃあもつとキリキリ働いてもうらぶつか。お前が持つていいイベントの準備、全部任せたからな」

「なつ、ちょつ、そりやないだろ英!..」

「もちろんやるよなあ…? ジゃないと…」

英センパイは含みを持たせて悠然と笑みを浮かべると、そつと俺の頬に手のひらを滑らせる。

ふつと耳元に吐息を吹き返られて、くすぐつたくて思わず肩を竦めると鷹司センパイがグッと噛み締めるように英センパイを睨んでいた。

…?

しかし、すぐに諦めたようにため息を零す。

この二人にしか分からないやりとりが終了したらしい。

今回は（も?）鷹司センパイが負けたようだった。

「ちつ、仕方ないね。ねえ叶芽、僕の分も早くお茶出してつー..」

「ええ~…なんで僕が…

すぐやりマス。」「

視線で脅されて渋々と室内の簡易キッチンへと向かう四柳院を尻目に、鷹司センパイは不機嫌さそのままにドカツとソファへと腰を下ろした。

「英センパイ、イベントって何のヤツですか‥?」

「ん? ああ、キミは去年は参加していないのか。文化祭の前に生徒たちのモチベーションアップと交友関係の強化を図ると称して生徒会主催のイベントを毎年やっているんだ。今年は肝試しだったか?」  
「そおだよ。こうなつたらとびっきりのお化けを用意してやるつ

目が据わったまま不敵に笑う鷹司センパイに、英センパイは呆れたような苦笑を浮かべた。

## 第十一話（前書き）

大変お待たせしてしまい申し訳ございません。  
(待っていてくださる方がいらっしゃるのかも疑問ですが…)  
しかも短い…。

終盤まで今しばらく掛かりますが終わらせる所はありますので、最後までお付き合っていただければ幸いです。

ああ忙しい。

だから何だつて俺がこんな田に…つーと一瞬思つが、もういい加減そんなことを思うのもアホらしくなってきたくらい、時間に追われまくっていた。

通常の手伝いに加えてさらに鷹司センパイのイベントの準備を任せられた上に、それらをすべて本人に報告しようと無茶を言われて仕事が増えてしまっていた。「報告なんてメモとかでいいじゃん、めんどくさい」という意見は却下された。

何でも、「直接顔を合わせて詳細に迅速に聞きたいから」だそーだ。

しかし毎回毎回、報告しようと鷹司センパイを探す時には何故か狙つたようにならぬもいなー。

またどこかでサボつてこるのでしたら、今度こそ怒鳴るだけでは気が治まらないだろつ。

あまりにも効率が悪すぎて、俺はいつも以上に苛立つていた。

(つーか殺す！ 縛り付けて部屋に監禁して転がして置くー)

そんな物騒なことを本気で考えながら、バタバタと廊下を走り抜けていく。

「あんこやつ…どこ行きやがつたつ。そつと口ノ渡してバイトに行かなきやなんなこつこのつー！」

生徒会室にはもうひんごるざすも無く、職員室、保健室、食堂と出没しそうな場所を当たつてみるけれどやはりいない。

英センpaiに教えてもらった、掛けたくなけれど仕方なく渋々

と必要に駆られて嫌々ながらも（本当にスッ「ゴイ嫌だつたのだ）鷹司センパイの携帯を鳴らして見たが、反応はナシ。

（電源切つてまで何やつてんだよアイツは～～～つづ……）

ストレス度がMAXに達しそうになりながら、今度は人気がなさそうな場所を探していく。

渡り廊下から体育館へと続く道を走つていいくと、何処からか声が聞こえたような気がした。

「まさか…ね」

嫌な予感が頭をよぎるけれど、氣のせいだと慰めつことにしてそつと近づいていく。

今日はどの部も活動をしていないので、体育館の周辺には誰もない。

ドアには鍵が掛けられ、中には入れないようになつてているはずだ。  
氣のせい氣のせい…… というかそうでなくては困るんだけど  
と自分にそう言い聞かせて、誰もいないことを確認したらも  
う今日は諦めて英センパイに伝言してもらおうと勝手に決める。

「…あ、うん…つ…」

「…つ…」

小さいけれど、情事の最中のような声が聞こえて思わず硬直する。  
それ以上進むこともなく、微妙に漏れ聞こえる声を耳にしながら、  
どうしようかと迷つてしまつた。

声と人の気配からして、この角を曲がつたくらいの場所に誰かい  
る。

（…えうじょう。アイツじやなかつたら邪魔しちゃ悪いよな…。いや…そもそも休み中とは言え校内でそーゆーことするのってどうなんだ…？　ああでもでもそうじやないかも知れないし…）

オロオロとしながらセコでナニをしているのか想像してしまひけれど、このままここにいても状況は変わらない。

むしろ、ただの盗み聞きをする野暮なヤツになってしまひ。

（自分が変態扱いされるのはさすがにイヤだ…）

「う～うと半泣き状態の心境だが、ヤツを捕まえなければ帰れない。

見つかからないからと言ひてバックレよつもなら次の日が怖いことこの上なかつた。

結局は我が身可愛き故に確かめるしかない。

（へんな口トしてませんよーー！）

祈るよつな気持ちでそつと壁に身を寄せ、音を立てないように様子を窺つた。

「　　シツ…！」

思わず悲鳴を上げなかつた自分を褒めてやりたい。

壁の向こう側で見たものはとても信じがたいものだつた。

弛緩したようにだらしなく壁に寄りかかり、足を絡ませるよつとして抱き合つてゐる二人の生徒がいた。

一人は全く知らない男子で、可愛らしい顔に恍惚とした表情を浮かべている。思わず見てしまつたこちらが恥ずかしくなるくらい色気を振りまいいて、その扇情的な雰囲気に寒気が走つた。

( 気持ち悪い…っ )

俺はたまらず吐き気を覚え、すぐさま顔を背けてしまった。口を手で押さえ込み上げる悪寒に耐えていたけれど、一向に治まる気配がない。よろめきながら壁伝いに身体を移動させ、少しばかり離れた場所で座り込んでしまった。

「何なんだよ、あれ……っ」

ただの情事の最中などでは無かつた。  
いいや、その方がまだマシだったと思つ。  
見たくないものではあつたが、それでもまだ、アレよりは現実味を帶びている。

「あ……っ」

ズキリと酷く頭が痛い。次第にガンガンと耳鳴りがしてきて、まともに考えられなくなつてくる。自分でも自分の状態が分からず、泣き喚きたいような、叫び出したこよつけ衝動に駆られた。

「だ…、め

その人は俺のもの。

「いやだよ……」

誰も、触らないで。

「どうして

？」

睦言の最中にいたもう一人の生徒は。

「なんで、俺じゃないんだよ……」

桜華学院の制服を着た、シユーランその人だつた。

## 第十二話

田が覚めると、そこは見覚えのある景色だった。

「ここはどこだらう、と辺りを見回すと、そこはかつて祖母と暮らしていた田舎にある山の中だった。

何故ここにいるのだろうかと思つていふと、大きな樹の幹に蹲うquatまる幼い自分の姿を見つけた。

（ああ、これは夢なんだ…）

『じか遠くを見るよつに自分の姿を見つめながら、その時のことを思い出した。

両親がある日突然、いなくなってしまったあの日。  
一人残されてしまつた凛を、祖母以外は誰も引き取りたがらなかつた。

幼いながらも周囲の感情に敏かつた凛は、『老いた祖母に預けるなんてとんでもない』と言う大人たちの裏事情に気付いていた。  
それでも頑として自分を育てると言つ祖母の気持ちは嬉しくはあつたが、自分のせいで大好きな祖母が欲に塗まみれた大人たちに酷いことを言われるのが嫌だつた。

『どうして、おれだけがいるんだよ…？』

自分をえいなればと思い山の中へと逃げ出した。けれど小さな足では頂上まで登りきることが出来ず、程よい平面に大きく聳そびえ立つ樹を見つけてそこに身を寄せていた。

『何をしていろ?』

ふいに頭上から落とされた声に驚き、小さな凛は反射的に顔を上げると、そこには背の高い銀色の髪をした大人が立っていた。

容姿は見たこともないほど美しく整つており、色の違う双眸がこちらを見つめている。

『『『』』』は私の領地だ。お前は何故この場所にあるのだ？』

冷たく問いかけてくる声は無機質で、けれど何処にも敵意を感じられない。

直感的に敵ではないと感じた凛は、真っ直ぐに那人を見つめ返した。

『おれのいばしょが、ないから…』

凛が答えると、その人は怪訝そうな顔をして続きを促してくる。なんとなく、この綺麗な人は自分の話を聞いてくれそうな気がして、小さな胸に秘めていた思いを零してしまった。

『おとーさんとおかーさんがきえちやつたんだ。ばーちゃんがおれとくらしうつて、言つてくれたけど、まわりのおとながメーワクになるからダメだつて…。シセツつてところか、おかねがあればオバさんちでもイイつて言つてた…』

自分で言つていて思わず涙ぐむ。けれど、最後まで言わなくちゃいけないような気がしていた。

『おれもそうしたほーがイイつて、おもつたんだ。だけど……』

『だけど、なんだ？』

『ひとりは、さみしいからイヤなんだ……』

「だから口にきたんだ」と言つて、胸元のシャツをぎゅうつと握り締めた。

怒られると思つてこれからどうしようか悩んだ。

不慣れな村で行ける場所はこの山だけ。山を降りれば大人たちに見つかってしまうし、かと言つて村に降りずにこの山以外の場所へ行くことは難しかった。

『口は、さみしくないのか?』

ふいに問い合わせられた意味がすぐには理解出来なかつた。この場所にいたのは偶然だつた。ただ、以前両親と登つたことのある山にもう一度来たかっただけなのだから。

途中で道を間違えていたかもしれないと不安になつていた時に、この樹を見つけた。

『なんかね、このき、あつたかいんだ』

『暖かい?』

『うん…。おれ、まえにきたときはなかつたとおもつんだけど、このきをみつけたとき、ちょっとうれしかつたんだ。このきがね、おれもさみしいって、言つたようなきがしたから』

『お前は本当に不思議なヤツだな』

その人はくつくつと笑つて、小さな凜の頭をぐしゃぐしゃと撫でた。

『いたつ、なにすんだよ?』

ぶーっと文句を言つと、尚もその人は楽しそうに微笑み、今度はもう少し優しく髪を撫でてくれる。

『くくく、気が変わったわ。お前だけは特別に、私の領地へ足を踏み入れることを許可してやるわ』

『…？ じょーち？ きよか？』

難しい言葉が並び、まだ幼い凛には理解出来なかつた。けれど、怒つている様子はないので、きっとこにこにいても良いのだろうと思つた。

『ねえ、おにーさん？ おねーさん？ どっちかわかんないけど、おなまえは？ おれはりん。おうみ りん。おとこだよ』

『……リン。良い響きの名だな。私の名は シュートッシ ハルドラン・アーク・フェルーナだ。私には正確な性別などはない。だが、強いて言つのなら、男になるな』

『しゅと……らん……なんとか？ おにーさんなの？』

『シユトツシハルドランだ。まあ良い。お前には特別に私の名をその身に宿すことを許そう』

『ううん？ ながくてむつかしーなまえだなあ。シユーランって よんでもいい？ おれといつしょで、どっちにもきこえるから』

『くくつ、そうだな。お前と一緒に。シユーラン… 中々良い愛称だ。私に愛称を付けるものなどお前くらいなものだ』

シユーランは嬉しそうに不思議な色の瞳を細めると、小さな手を取つて自分の大きなそれと重ね、凛の胸元へと導いた。

『我、シユトツシハルドラン・アーク・フェルーナの名において命ず。この者に我的真名を宿し、いつ如何なる時にもその名において我を召喚することを許す』

シユーランが何事かを囁くと、急に触れられた箇所が暖かくなつ

て輝いた。

『うわっ、なんだよこれー?』

驚いて光を感じたところを見つめると、心臓の辺りに小さな痣の  
ようなものが出来ている。一瞬だけチクリとして痛みを感じたけれど、  
次に見た瞬間にはその痣はどこにも無くなっていた。

『うわーすげーっ。シユーラン、なにしたの?』

『魂の誓約だ。これで私はいつでもお前が何処にいるのか分かるし、  
お前が何をしているのかも大体分かるようになつた。その代わり、  
お前はいつでも私の名を呼べば、お前の傍に呼ぶことが出来る』

『うん…? おれにはシユーランのこと、わかんないの?』

『お前がもう少し大人になれば出来なくなるが……まあ、ようす  
るに、私の名を呼べばすぐにお前の元へ来ることだ』

『ホントウっ!? ジャあ…じゃあ、おれ、たくさんシユーランに  
あいたいっ』

『かまわぬ。けれど、この誓約は私の真名でないとならぬのだぞ?』

『しんみょーって…わつきのながい、アレ?』

『そうだ』

『ええ~…、あれにはちょっと、むづ。じゃあつ、また口口にきて  
もいいつー?』

『くくっ、お前が大人になるまでは無理か。なりば、いつでも来る  
と良い。私はしばらく、口口に滞在しているからな』

『やつたつ。シユーラン、ありがとつー!』

満面の笑みで抱きついて礼を言つと、シユーランは驚いたように  
双眸を見開いた。なんで? と思つてみると、やがて戸惑いながら  
も優しく抱きしめ返してくれるのを感じた。

凛はもっと嬉しくなつて、最上の笑みをシユーランに向けていた。

「シュー・ラン……」

この時確かに、自分は幸せだった。

寂しくて、祖母を苦しめたくなくて、でもどうじょひつも無かつた幼い自分を救つてくれた手。

結局祖母は周囲の反対を押し切つて、自分を育ててくれたけれど、無理が祟つて数ヶ後には亡くなつてしまつた。

その後、時を同じくしてシュー・ランとも会えなくなつて、東京の伯母の下へと預けられた。

中学までの生活費のほとんどは両親と祖母の残してくれたもので補つたけれど、伯母の家に養育費として奪われてしまつたものの方が多かつた。

学費だけはどうしても桜華学院に行きたくて贅沢してしまつたけれど、それ以外は全てバイト代で補うようになった。けれどそれはお金が足りないだけでなく、単に寂しいからあの家にいたくないだけだつた。

伯母の家では自分は いないも同然の存在なのだから。

「俺にはもう、シュー・ランしかいないんだよ……」

それなのに、あの人にとって自分は…必要のない存在なのかもしれない。

「シュートツ・ショルドラン・アーク・フェルーナ……」

今その名を口にしても約束通り現れてはくれない絶望に、涙を抑えることなど出来るはずが無かつた。



## 第十二話（後書き）

お待たせ致しました。よつやく全体が何となく書けてきたよつな気がします。クオリティーが低くてすみません。。。誤字脱字・ご意見・評価、どうぞよろしくお願ひ致します。また、活動報告にも記載致しましたが、前作「chronos」の移行が完了次第、こちらの作品もムーンライトノベルの方へ移行する予定です。読者様の年齢層が分からぬので…。もし、18歳未満の読者様がいらっしゃるようでしたら、性描写無しで進めたものをこちらに投稿したいと思います。早く更新しないと…っ、といつも思つてはいるので（実行出来でなくすみません。。。）、今後ともどうぞよろしくお願ひ申し上げます m(— —) m

## 第十四話

「何やつてるの」

不意に頭上から落とされた言葉に、すぐに気がつかなかつた。

「……なんで、泣いてるの」

泣いてなんかいない。

ただ、心が空っぽになつたみたいに、今は何にも考えられないだけだつた。

「じつじてキミは、僕見てくれないんだろうね」

大きなため息と共に零された言葉は、どこか悲しげに聞こえた。

何を言つてるんだろう？

俺は、ちゃんと見てるじゃないか。

……アンタのこと。

「やつこいつ意味じゃない。そんな瞳<sup>ひとみ</sup>は、ただ姿を映してるだけだよ」

俺はただ、会いたかつただけなんだ。

あの人に。

夢じやなくて、幻でもなくて。

そう……恋でも憧れでもなくて、ただの執着心だけなんだよ。

「だから？」

だから……アンタに会いたくなかった。

知りたくないんだ。

お願いだから……

優しくしないで。

「ふふっ……、バカだね、凛は」

言葉とともに、柔らかな体温が身体を包み込んだ。  
温かくて心地が良いのに、酷く逃げ出したい気持ちに駆けられる。

「や、だ」

小さく抵抗を示すと、尚更強く温もりに囚われる。

「ちやんと、僕を見て」

ぎゅっと抱きしめられたる力強さに、ビクが安心感を覚えるのは何故だろう。

不思議に思つてそつと皿線を上げると、泣き笑いみたいな顔をした男の表情があつた。

「そんな顔してもダメだよ。僕にはただ  
つてしか聞こえない

優しくして欲しい

何言つてんの……？」

俺は、ただ

「つたぐ、可愛い顔して、意外と意地つ張りなんだから。モーゆー  
とい、昔から全然変わっていないね」

は…？

アンタとは去年からの付き合いだけど。  
ぼんやりとした頭でやつ心の中でぼやくと、何故か答えはすぐこ  
返つてくる。

「好きだよ、凛」

唐突に贈られた言葉は、まるで蜜のよう。

「ずっと、キミだけを」

どこか耳に馴染む美声が、俺の思考を鈍らせていく。  
甘く、緩やかに、けれど確実に大切なものを奪っていく感覚がし  
た。

「だから、  
いや、だつ！」

頭の中を警戒するように鐘が鳴り響く。  
その先を聞いてはいけないような気がして。  
聞いてしまつたら、それが最後のような予感がして。  
けれど。

必死の静止も虚しく、俺の胸を貫いていく。

「だから、アイツの存在は今すぐ忘れない」

発せられた言葉と共に、どこかでガラスの割れる音がした。

## 第十四話（後書き）

感想やお気に入り登録をいただきまして、本当にありがとうございます。

現在、復帰に向けて準備中でございます。

すんごい微妙なところで止まつて申し訳ないです。

気がとつても長い読者様に、最大の感謝を申し上げます。  
重ねて御礼申し上げます。

## 第十五話

鷹司センパイは、一体何を考えているんだろうか。  
ここ数日の俺の頭の中はそれだけが占めていた。

(あの人は、シユーランの存在を知っている?)

ありえない。

だけど、あの物言いはどう考えても知っているような言い方だった。  
どうして?

「……だめだ、いくら考えてもわからんねえや」

ふう、とため息を零すけれど、気が付くとまた同じことを考えて  
いる自分がいた。

鷹司センパイは、俺にどうして欲しいのだろうか。  
あの人を見ろって?

ちらりと彼が座っているデスクの方を見やると、珍しく真面目に  
書類を片付けているようだった。

隣には、冷ややかな表情をしたままの英センパイが何事かを言つ  
ている。

(また怒られてんのかな)

まあ、俺には関係ないんだけど…と一人じぢでいると、突然目の  
前にドンッ!! と大量の書類が置かれた。

「……っ！？」

驚いて紙の山が降りてきた場所を見上げると、天使のよつた顔をした悪魔がにこやかに微笑んでいた。

(やべえ、まずい……)

焦つて逃げようとしたが、時は既に遅し。

「凛ちやああん？ 隨分と暇そうだね？ 一応、くそ忙しい時期だと思つてるんだけどね、僕は？」  
「ああ～、俺も、そつ……だと思つてますよ、一応、ハイ」

知らず敬語になってしまつていいのはこ愛嬌だ。

思わず逃げ腰になる俺だが、当然そのまま逃がしてくれるような四柳院ではない。

「これ、よろしくねっ」

語尾にハートマークでも付いていそうな物言いだが、目は全然、これっぽっちも笑つてなどいなかつた。

「はーい……」

これ以上仕事を増やされでは堪るまいと大人しく頷いておく。

(どうしても終わらなかつたら、あとで英センパイに手伝つてもらおう…)

ぱそりと心の中で零すと、自席に戻つておいた四柳院が思い

切り振り返った。

びくっと反射的に肩を震わせてしまつ自分を情けなく思うが、これ以上は本気で今日中に終わるような量じゃない。

何か言うのかと身構えていると、そんな俺の様子に満足したのか、特に何も言わずにそのまま戻つて行つた。

「……頑張り」

とりあえず今は悩んでいる時間がもつたいたい。

田の前の殺人的量を片付けるべく、じぶしふと書類に手を伸ばした。

「終わつ……たあ～～つ

ぐてつと机に突つ伏すと、知らずに溜まつていた疲労が一気に身体に圧し掛かってきた。

「もうムリ、何も見たくねえ……活字なんて嫌いだ……」

勉強なんて得意ではない上に、読書なんてほとんどしない。

そんな俺が毎日毎日書類と闘つっていたのだ。

想像以上に疲れたのは言つまでもない。

「もう何もしませーん」と宣言するようにだらーんと重力に身を任せていると、上から優しく髪を撫でられる感触がした。

「お疲れ、凜。良く頑張ったな」

顔を上げる体力もろくに残つておらず、だらしない体勢のまま視線だけ見上げると、少しだけ疲労の色が見える英センパイが労いの言葉をくれた。

「ありがとうございます。英センパイも、お疲れ様でした」

今日でやっと、全ての準備が終わったのだ。

人一倍、いや、十倍以上働いている英センパイのほうがよっぽど大変だったというのに、下つ端小間使いでしかもあまり役に立つてない（つてか補習がわりにお邪魔させてもらつてはいる身分の）俺にまで気遣いをしてくれるなんて、本当に良い人だ。

金持ちセレブ嫌い（アレルギーと言つてもいい！）な俺だったが、ここ数週間で彼らと接しているうちに、先入観はいけないと反省した。

まあ、相変わらず大つつ嫌いな部類の人間もいるにはいるのだが。けれど、この生徒会室の中にそんな愚者がいるはずも無いので、俺は快適な気分のまま仕事をすることが出来た。

肉体的には<sup>ひ肉ういじょは</sup>疲労困憊だけれど。

「叶芽、お茶」

「ボクはお茶じゃありません……ちょっと待つ！ いつたあー、ボクだって疲れてるのにいい」

文句を言おうとした四柳院は、それすら許されないしつこい傍らのペットボトルを投げつけられている。

いつも思うけれど、鷹司センパイの四柳院に対する扱いは非道だ。だけどなんだか微笑ましい（つか、とばっちりを受けたくない）

から放つていいけど。

英センパイに頭を撫でられながらそんなことを考えていると、普段より幾分機嫌の悪そうな表情で残りの仕事を片付けている鷹司センpaiの顔が目に入った。

「四柳院、俺がやるから良いよ」

そう言って、疲れた身体を無理やり起き起こす。

英センパイがちょっと意外そうな顔をした後で、何やら意味深な笑みを浮かべていたけれど、ここには知らんぷりを決め込む。

（俺が一番下つ端だし、皆疲れてるし、もう自分のは終わつたし、お茶ぐら……って何言い訳してんだよ、俺は）

げんなりと自分の心に理由付けをする口の思考が憎たらしい。もう少し、素直になればいいのに。

（ムリだけど。）

間髪入れずに突っ込みを入れる自分の言い訳癖は治りそうもないで諦めるとして、誰かに何か言われる前にそそくさと簡易キッチンへと向かう。

いつも英センパイが煎ってくれるのを見ていたので、何処に何があるのかは分かっていた。

……美味しく煎れられるかは別として。

「うーん、こんなもんかな」

濃い目に抽出した紅茶に氷を入れて、少し冷ましておく。

そこへさらに、以前冷凍庫に入れて作つておいた蜂蜜色の氷をグ

ラスに投下し、準備オッケー。

最後に微量のトマトジュースを加えて完成だ。

「これの何処が美味しいのか全つつつ然、理解出来ないけどな……」

酸味と微かな甘みが紅茶の香りと混ざり合つて、上品な旨みが生まれるらしい……。

そんな高尚な趣味は俺にはないので、同じく冷やした紅茶に氷を追加してアイスティー、四柳院にはオレンジジュースをブレンドしてオレンジティー、そして英センパイはそのままのストレートティーを作った。

余った分はパットに流し込んで冷凍庫で冷やしておく。

こうすれば、後でお代わりを要求されても味が薄まらない氷を作れるからだ。

「はい、お待たせしました~」

トレイにグラスを持つていくと、英センパイがソファの傍のテーブルに置くように言う。

俺は言われるままにいつもの配置にグラスを置いた。

長方形の大きめのテーブルに英センパイ、鷹司センパイ、四柳院、俺の順にぐるっと時計周りになっている。

ちなみに俺はいつも英センパイの隣なので、必然的に鷹司センパイとは対角線の位置にいることになる。

「ありがと、凛。けど、ビーして僕の分だけじゃなのかな?」

全員分を持ってきた俺に不服そうな顔をする鷹司センパイ。いや、単に手間じやなかつたから作っただけなんだけど……。

「まあ、まあ、いいじゃないですか。とつあえずソリソリで休憩したらどうですか」

めんどくせえーと思いつつ、ストレス度MAXになつたある彼に喧嘩を売るのは得策ではないので止めておく。

(これ以上疲れる)とほしたくないんだつーの…)

はあ、とため息を吐きつつ、定位位置に座つて汗をかき始めたグラスに口をつけた。

英センパイ、四柳院も順に席に着くけれど、飲み物を所望した本人が未だデスクに噛り付いたままだ。

「鷹司センパイ、お茶……ぬるくなっちゃいますけど

「…………凜」

「はい?」

「持つてきて

「何で俺が…………つてはいはい、持つてけばいいんでしょ、そつちま

で「

はあ～～、とまたもやため息を吐きつつ、濡れたグラスの底をさつと拭いて持つて行く。

山積みになつた書類まで濡れたら大惨事になること必須だ。

俺だつたらそんな危険な場所に水分を持ち込んだりなんか出来ない(一回零して全部やり直しになつたことがあるからだけど。)

「はい、凜くん宅急便の配達ですよ。配達料はアイス一個ね

「ふうん? アイス一個でキミが僕に会いに来てくれるなら、毎日でも頼もうかな」

「はっ!? 何寝ぼけてんだよつー!? 配達範囲はこの生徒会室内

のみなんでもうり！

「なあーんだ、残念。あつ、そうだ、凛

「ん？」

さつさと離れようとしていた俺は、不自然に名前を呼ばれたこと  
に何の疑問も持たず振り向いてしまった。

לען!

「捺印代わり、だよ」  
なついん

そうほざいたヤツが軽く触れた先は、俺の脣、だつた。

「ふ」

あれ、意外と怒ってない？ じゃあもう一回

頬が羞恥に赤くなつていいくのを隠すため、俺は全力でヤツにビンタを食らわしてやつた。

( 真面目に頑張つてるなんて褒めるんじやなかつたっ! )

もう絶対に甘い顔はしてやるまいと心に誓うけれど、最近どうにも判断が甘い自分にはムリだろうな、どこかで思う俺だった。

この一きなんの氣 気になる氣……  
間違えません、わざとです……。

気になっちゃうんだよ、とにかく……

何故かは分からぬけど、シュー・ランのこととかこれからのこととか考へてると、絶対に頭に過ぎないんだよどうしてか……  
今どうしてるんだろうかとか、この間のことにしてるんじゃな  
いかとか、また怒らせちまつたなあとがイロイロと……  
え？ 誰のことかって？ そりゃ……アイツの、ひと……だよ。

「ひいてと待てよ俺つー?」

ほんの一瞬前まで考へていた自分の思考が恐ろしい。  
ナニ乙女みたいなこと考へてんだよ俺！？  
こやこやこやこや、そつじやなくつて、問題は氣になつてるとか  
思つちやつてことだよ。

でも、本当に……俺ほんじついたいんだつ。あと少し。

ほんのちょっと、何かを見つけたことが出来れば、きちんとシュー  
ーランに会えると思つんだ。

この間見てしまつたシュー・ランの姿。  
認めたくない行為だつたけれど、あれは間違いなく彼だつた。  
長く聞ずつと求めて止まなかつた。

記憶の中で美化してしまつことつてあると想つんだけど、そんな

ものを一掃してしまつくりい綺麗で美しいままのショーラン。

その姿は驚くほど何も変わつてなどいなかつた。

透き通つた銀の髪も、左右で色の違つ二つの瞳も。何年も前に見た、造りものように整にすがた顔立ちさえも、時間が止まつたようにあの日のままで。

けれどその表情だけは、見たことがないほど怖かつた。

「ショーランは、俺にどうして欲しいの……？」

「んなにも近くにいるのに、あちこちにその存在を思わせる痕跡こんせきがあるの」。自分の田の前に、現れてはくれない彼の人。

「俺が、ショーランだけを、見ていいから……？」

どちらも気になつてしまつ、優柔不断な自分に嫌気が差してくる。アイツのこともちゃんと見なくちゃつて思つているのも本当だ。だけど、自分にとつて一番大切なのは

？

「俺の……バカ」

どつちも欲しいなんて、何時の間にそんなに我慢になつてしまつたんだろうか。

「寂しいのが、嫌なだけのくせに……」

傍にいてくれるのなら、誰でもいいのかもしれないなんて、どれほど自分は傲慢な人間なんだろう。

「田に見えているものだけが全てじゃない」って、知つていぐせ

「

それなのに、こんなにも惑わされてしまつ。  
現実はいつだって待ってはくれなくて。

知らない間に自分は、何かを間違えてしまったのかも知れなかつた。

「凛！」

肝試しイベント当日。

集合場所で出席簿を取つていると、後ろから声を掛けられた。

「はい？ …… ってなんだ、雅人じゅん

辺りも薄つすらと暗くなり始め、周辺にはバラバラと人が集まり始めている。

振り返ると、悪友である九条雅人がこちらへとやつて來た。

「なんだ、つて……相変わらず冷たいな、俺の親友様は。最近俺に会えなくて拗ねてんのか？」

「ばつ！ ナー言つてんだよお前はつ！ ンんな訳あるかつ！…！」

「冗談はマジで止めてくれ。

後ろから殺氣立つた視線がビシバシ感じるなんて思つのは、俺の氣のせいであつて欲しいと切実に願うよ……。

「えへへ……ツレないヤツだな、全く。俺がこんなにも愛してゐつて  
言ひの元」

「…………」

「コイツ、本<sup>マジ</sup>氣で、殺<sup>ヤ</sup>るしかない！」

「ふーん……なんだか楽しそうだね、凛？」

「つつ！」

完全犯罪を頭の中で計画していたけれど、そんなものはあつとい  
う間に吹つ飛ぶくらいある意味怖い声を掛けられた。

(マズイ……いろんな意味でマズイぞこれは……)

雅人と副会長は仲が悪い。

いや、悪いという言葉は語弊<sup>レバニ</sup>かもしれない。

けれど、親しくもなければ良好な関係ではないことだけは確かだ。  
その証拠に、さつきまでふざけていた雅人の空気が一変して険呑  
な雰囲気になつてゐる。

「はいはいはい、雅人も性質<sup>たち</sup>の悪い冗談ばつか言つてないで、あつ  
ちの四柳院の方で受付してこいよ。俺はまだ仕事あるから、なつ」

俺はそう言つて、グイと雅人の背を押して、四柳院の方へと追い  
やる。

渋々といった感じで誤魔化してくれた雅人がいなくなると、今  
度は別の意味で危険な雰囲気が流れるのを感じた。

ある意味でドキドキと緊張してくるのが自分でも分かる。

(どうしよう、最近の俺はこんなのはっかりだ)

何でこんなにも意識してしまつのだろ？。

ただ、気になる……それだけなのに。

「……凛？」

「……」

ゆつくづと鷹司先輩の方を向くと、さつきの不機嫌とは何処へやら、優しく自分を見つめてくる瞳とじぶつかつた。

薄いグレーの瞳。

柔らかそうな、サラサラと揺れる薄茶の髪。

王子様の異名を持つ、バランスの取れた綺麗な顔立ち。

いつもアホなことばっか言つくなせに、本当は誰よりも先を考えている不思議な人。

(……そうだ。本当は、バカなんかじゃ全然なくて、生徒会長と同じくらい賢い人、なんだよな)

「この夏休み中に幾度と無く見てきた。

くだらないって思つたり、効率が悪いって思つことも多かつたけれど、結果としていつだつてそれが最善だつたんだつて何度も思つた。

一緒に仕事をしなければ知りえなかつた一面。

今日の段取りだつて、自分はただ言われた通りのことを成すだけ。スケジュールや必要なものなど、決めなければならぬ細かいことも全てこの人が自分でやつたんだ。

自分はただ、指示されたことをこなしていくだけで、何も考えなくて良かつたんだ。

(俺……見ているようで、何も見てなかつたんだよな)

有能さを表すかのよつて、続々と人が集まつてきている。

休み中なんて、連絡が滞つたりすることなんてザラにあるのよ。この人に掛かれば、そんな初歩的な問題なんて絶対に起こりない。

(忘れてたけど、生徒会長の次に入氣あるんだよな、この人……)

何でそんな人が俺なんかに構つてくるんだろ? と今まで考え始めていると、目の前にすいとその秀麗な顔を寄せられた。

「つーな、なんですかつー!」

「そんなに熱っぽい瞳で見つめられてたら、勘違いもあるよ。」

「はあつー? 何言つて……?」

文句を言つたけれど、軽くちゅうけつと胸に触れられる。「こんなところで一体ナニを考えてるんだよコイツは!?

(つて違うだろ俺つー怒るの? ほんとじやないだろ——つー! —)

半ば慣れてきてしまったこの行為に、何の疑問も持たない自分が恐ろしい。

もつとキモチワルイだと、こんなことは止めて欲しいとか、言つべきことほたくさんあるはずなのに。

振り回されっぱかりで、冷静な判断なんて出来るはずが無かつた。

「もう……始まつます。早く行きましょ!」

今の俺に言えるのは、それだけだった。



「……マジですか。」  
「うん、マジだねー」  
「コレってなんか故意に仕掛けられてたりするんじゃないの……？」  
「うん、そうだねー」  
「あはは……やっぱり……つてアンタなつ……」

参加者が全員集まり、残つたくじを引くと何故か鷹司先輩と同じ番号が。

この肝試しは一人一組でペアを組み、枷で互いの手首を繋いで、決められたルートを通つて最後に外すというもの。

終点にその枷（まあ普通に手錠だよね）を外す鍵があるらしい。ただし、通るルートは番号に沿つて若干違うらしく、もちろん鍵のある場所も違うので、ズルが出来ない仕組みになっているのだ。普通は男女でペアになるはず、なんだけど……

「何で俺がアンタと一緒に回んなくちゃなんないんですかつ……」「ホラ、だつて僕たち仲良しだし？」

どこがだよつ……と突つ込んでやりたいけどグッと我慢する。へんに抵抗し過ぎて身に危険が及ぶのを回避するためだ。そうこうしているうちに、手際良くカシャンと音を立てて互いの手首が繫がれる。

（ヤバイ……思つたより距離近すぎじゃねえか……つづ）

少しでもバランスを崩したら最後、ヤツの思つがままになつそう

なほど至近距離だった。

「はい、出来た。じゃあ行こうか」

「わかつ……わかつたから先に行くなつ」

グイと引つ張られて危うく転びそうになるけれど、何とか踏ん張つて鷹司先輩の後に続いていく。

「さて、僕たちのルートにはナニが出るのかな？」

「……ガーモとハモアンタが自分で決めたんじゃなしですか」

「」

「企むなんて人聞きが悪いなあ。僕たちのコースにはどびつきりの

人の気も知らないでズンズン進んでいく鷹司先輩。俺は引きずられながらも、何とかその背について行くしかなかつ

た。

辺りはもうすっかりと日も落ち、薄闇に包まれている。

それなりに少なくない人数が、この広大な校内のどこかにいると  
言うのにも関わらず、俺と鷹司先輩の一人以外、誰かいるという気  
配が全くなかつた。

不気味すぎるくらい静かな道のりの中で、鷹司先輩は一言も発し

その態度すらも何か意味があるんじゃないかと疑つてしまつのは、

仕方が無いような気がした。

「センパイ……？」

「ぶか  
訝しみながら、不意に立ち止まつた鷹司先輩に声を掛ける。  
一向に振り向かない先輩が向ける視線の先へと自分も向かうと、  
そこには満開に咲き誇つたあの桜の木があつた。」

「凄い……綺麗……」

真夏にも関わらず美しく華を開いているその光景は、表現しがたいほどに綺麗だった。

夜空に舞う星の煌きに照らされて、キラキラと輝いているように見える薄紅色の花びら。

前はよく昼間に来ていたけれど、夏休みに入つてからは一度も来ていなかつたから知らなかつた。

何時の間に、こんなに季節外れの華を咲かせていたのだろうか。

「Jの樹はね、特別なんだよ」

不意に、吐息を零すように鷹司先輩が口を開く。  
さつきまで、何を言つても黙つていたのに。

「一体何なのだろう。」

不思議に思つてその顔を見上げると、その薄い色彩が、闇と混ざり合つて濃い藍色のような瞳に見えた。

角度を変えると、青とも言えないような不思議な色。

その吸い込まれそうな神秘的な色に見とれていると、困ったように鷹司先輩が笑つた。

「ねえ、凛……」

「はー……」

「キミはどうして、僕の前に現れたりしたのかな」

「……？」

言つてゐることの意味が分からぬ。

どこか達観したような先輩の視線の先には、変わらずあり続ける

大木の桜があつた。

「キミが現れたりしなければ、僕は僕のままでいられたのにね」

「あの、それってどういう意味ですか」

さつきから、話している言葉に一貫性が無さ過ぎて分からぬ。  
それでも先輩の中では統一されているのか、それには答えずに言葉を繋げていつた。

「ー」の樹はね、とある存在と共に鳴しているんだ。そいつが人の生氣を得ると、この華が満開に咲く。まるで、得た血を吸つてゐるかのよつな色をしてね

侮蔑するよつて軽く吐くと、そつと俺と繋がれた手を伸ばしてその樹に触れた。

「……っー？」

すると、先ほどまで薄紅色だったその花びらたちが、あつといつ間に濃い紅色になっていく。

その光景に驚いていると、鷹司先輩はその手を放して俺の頬に触れた。

「僕が、怖い？」

「この木の色をした花と同じようだ。

言外に言われたような気がした。

けれどその言葉に返すものを、俺は持ち合させてなどいなかつた。

「怖い、かどうかは分からぬ。でも……」「でも？」

何て言つたらいいのか分からぬ。

何て言つて欲しいのかも分からぬ。

だけど、今のこの人は、なんだか……

「なんだか、今のアンタは……寂しそうだ」「！」

弾かれたよくな顔をした鷹司先輩を、初めてみたよくな気がした。だけどその表情は、昔見たよくな気もした。

全然顔立ちは似てなんかないのに。

何でだろう。

だけど確かに今のこの人は、どこか懐かしいほど不安定な雰囲気をしている。

あの人を求めて止まない、寂しがりの自分と同じようだ。

「アンタがどう思おうと、俺はこの樹が好きだよ。季節外れだろうと、変わった色をしていようと」

「……どうして？」

「だって、ここにいると暖かいから

「…………」「

「この樹も俺も、一緒になんだ。寂しくて、でも誰かに傍にいて欲しくて。だから、」「

「だから~。」

「俺がアンタの前に現れたのは偶然でも、この樹が傍にある限り、アンタとの樹が繋がっている限り、きっと何度でもアンタと会つよつの気がするよ」

何故なら自分は、この樹に惹かれてこの学院にやつてきたのだから。

「だから~。」

「こんなにも気になつてしまつのかも知れない。」

「人がどうして俺に構うのかは分からぬけれど。」

「知りたい……とは思つよ、アンタの」と

知らないから気になつてしまつ。

見えないからもつと見たくなつてしまつ。

そうだ、きっとそんな簡単なことだつたんだと今更ながらに思つた。

考えすぎて見えなくなつていたことだけ、本当はむつと単純なことなんだ。

知りたい。

今はただ、それだけ。

「つー」

不意に強く抱き寄せられ、きつく腕を回される。

突然のこと過ぎて戸惑ついていたけれど、少し震えるその腕に気づいた俺は、自由なほうの腕をそつとその背に回した。

シャラン、と音を立てて、繋がつたままの手が頬に寄せられる。

見上げると、酷く情けないほど不安そつた表情をした先輩の瞳と  
ぶつかった。

「なんて顔してんですか」

困ったように微笑むと、一瞬の間の後、強く唇を奪われた。

「んっ、ふ…」

ちゅう、くちゅう、と重ねられると同時に、洩れ聞こえるその水音に羞恥心を煽られる。

かつてないほど荒々しく施される口付けに、流されるままに飲み込まれていった。

「凜……り、ん……」

「あっ、はあっ……、も、や、め……っ」

角度を変えて何度も深く重ねられる口付け。

酸素を求めて口を開けば、熱く濡れたものが差し込まれた。

「んう、く……あ、は……あっ」

歯列をなぞり、上顎を舐められ、口腔を犯すよつに丹念に搾り取  
られていく。

舌を絡め取られると、ジンと痺れるほどにきつへ吸われた。

(何で……俺、キスしてんだろ……)

ボーッと痺れる頭のどこかで考えるけれど、強すぎるのはびつけに思  
考が上手く回らない。

『えられるまま』にその熱に翻弄されていった。

「リン……僕は……」

「……あつ、はあ……」

なに、と続けようとした言葉は、吐息に攪さわぐられて音も無く消えていった。

白い雪。

薄紅色の花びら。

その先にいたのは……

血に塗れた、あの人。

## 第十八話（前書き）

少しだけ残酷描写があります。  
苦手な方はご注意願います。

## 第十八話

それは突然のことだった。

新月の夜、星の瞬きが雲に隠れて、一瞬の闇が生まれた瞬間。目の前の大切な存在が、あつと/or間に姿を変えた。

銀の美しい髪は漆黒に。  
紅と碧の双眸は真紅に。

その姿は……いつか聞いた、魔女の力を受け継ぐ者と合致していた。

容貌を変えた妖は、真っ直ぐに己を見つめ、その手に持つ刃をこちらへと向けた。

「シユーラン……？」

どうして、と続けようとした言葉は、音にならなかつた。

恐怖よりも、悲しみよりも、何故という思いしかなかつた。

不思議なほど落ち着いていて、純粹に、そう……ただ彼を信じているだけだった。

「何故なのだ……」

なぜ？ それはおれが聞きたいよ、シユーラン。

「何故、私を憎まない！？ どうしてお前は……っ、私はお前を害そうとしているのに……！ そのような瞳で私を見ないでくれ……っ！」

苦しそうに言葉を繋ぐシユーランに、俺はただ、見つめるにじつ

が出来なかつた。

俺を殺したいなら殺しても良いよ。  
ゆつくつと、その思いが伝わるよつて笑つた。

「私は異形だ。呪われし忌み子だ。魔女の血を受け継ぐ者なのだ。  
その強大な力の代償は、己の命。私に残された時間はあと10数年  
しかない。だけどお前を、お前の受け継ぐその血を……」

「己の身に宿すことひつことが出来れば、と呴いた言葉は、風に攬われてす  
ぐに消えていった。

「ねえ、シュー・ラン」

普段は大人で、自分をからかってばっかりで、だけビ凄く優しい  
その存在に声を掛けた。

今にも泣き出しそうなほど不安定なこの人に、自分がしてあげら  
れることなんてほとんどない。  
だけどそれでも。

「おれのこちがひつよつながら、こくらでもあげるよ

出来ることがあるのなら、おれはためらつたりしないよ。  
だから。

「だから、すきにしていいよ」

それだけ伝えると、そつと目を閉じて衝撃が訪れるのを待つた。  
出来ればあんまり痛くしないで欲しいな、と思つたけれど、それ  
さえもシュー・ランに任せようと思つた。

しばらくじつとしていたけれど、一向に動く気配がない。

カラーン、と何かが落ちる音がした。

不思議に思つて目を開けると、刃から手を放し、呆然と立ち尽くす彼の姿が見えた。

「シユーラン?」

どうしたの、と声を掛けて近づき、その手に触ると、冷たく震えているのに気が付いた。

「だいじょうぶ? わむこ?」

心配になつて両手で手を包むと、あつたかくなるよしがれゅうと握り締めた。

すると、突然シユーランはもつ片方の腕で自分を強く抱きしめてきた。

僅かに震えている身体。

少しでも震えが止まればいいなと思い、シユーランの手を温めていた手を片方だけ外して、そつとその手に腕を回した。

小さな手では包みきれないほど大きな手のひら。

けれど優しくて温かいその手が、俺は大好きだった。

妖故に、温度を持たないと以前言つていた。

だけど自分にとつては、いつだって温かかった。

不安も、寂しさも、孤独も、すべてを包んでくれたその手を持つこの人が、自分にとつて何よりも大切な存在だつたから。

「おれは、シユーランがだいすきだよ」

自分の命よりも、何かを優先しようとして悩むほど優しい人。

俺のことを考えてくれるるのは嬉しいけれど、シユーラン自身を失うほつが嫌だつた。

死なないで。

俺に出来ることがあるのなら、シユーランを失わないで済むのな  
い。

何だつて、するよ。

「リン……私は、」

「だいじょ「うぶだから、ね？」

そういうで、抱きしめられていた居心地の良い場所から手を放した。

地面に落ちたままの刃の柄つかを両手で掴み、シユーランの力の源で  
ある桜の木の下へと進む。

「リン、お前何を

「おれはこのきも、シユーランのおやしきことのひとたちも、だい  
すきなんだ。みんなだつて、シユーランのこと、ほんとほだいすき  
なんだよ」

だから悲しい顔をしないで。

本当は、寂しくなんてないんだよ。

「おれにはもう、だれもいないけど、シユーランにはシユーランの  
ことがだいすきなひとたちが、いっぱいいるから。だから、だいじ  
ょうぶなんだよ」

俺がいなくなつても、独りじやないよ。

「みんなを、だいじにしなくちゃだめだからね  
「リン！　何をしてこる……っ。私には、お前が

だから、笑つて？

「シユーラン、だいすき。だから、またね」

また、何処かで出合えますよ!」。

「リン……」

そして俺は、その手にした刃を胸に突き立てる。

## 第十九話

「馬鹿な……っ！ リン、死ぬなっ…… 私には、お前が……！」

震える声で自分の名を呼ぶ人がいる。  
だけどもうすぐ聞こえなくなるのだろう。  
意識が遠くなつていく中で、薄つすらと見えたその人は、自身の  
血に塗れて自分の身体を抱きしめていた。

「エイ！ カナメ！」

「はい、ここに」

「はい、ただいま」

「私には……リンを殺せない」

「…………」

「…………」

突き立てた刃とそつと引き抜くと、シユーランはその刃で腕に傷  
を付けた。

「……よろしいのですか」

静かに問いかけるエイの声には答えず、シユーランは口の血を傷  
口に落とした。

ぱうっと白い光を発すると、少しづつ傷が癒えていく。

温かい……シユーランみたいだな、と思つていると、暗闇に意識  
を奪われた。

「すまない、リン」

辛そうな声が聞こえると、頬に濡れたものが落ちたような気がした。

### 「フェルーナ様」

使い魔に呼ばれるけれど、その声には答えなかつた。  
じつと座つたまま、ベッドに横たわる小さな存在の手を握り締める。

いつもより体温が低くなつてしまつた愛しい子供。  
その命の灯火は、今にも消えてしまいそうなほど儂いものだつた。  
どうしてこの子に刃を向けられたのだろう。  
このまま、運命に逆らうことなく消えていこうと決めていたのに。

「フェルーナ様、そろそろお休みになられてください」

もう一人の配下が休めと催促していくけれど、無言で制した。  
休む？

そんな必要など、自分にはないのに。

眠り続ける凜の黒髪をそつと撫でると、サラサラと指の隙間から零れ落ちていった。

以前、自分の髪が綺麗だとつてくれた子。  
呪われし両目オッドアイだと知つてもなお、自分を好きだとつてくれた愛しい存在。

「私には、お前が必要なのに……」

もう、傍にはいられない。

これ以上一緒にいてしまつたら、また一族の者が凜の血を求めてしまうだろう。

たかが自分一人の生命を延ばすためだけに。

人間からしたら、それは途方もない時間だろつ。

残された一〇数年という時間は、人間にとつては長くとも、自分たちのような妖あやかしにとつては瞬きほどに短いものだ。

それなのに、たつた数ヶ月しか一緒にいなかつたこの時間は、これまでの長い生命の中で最も蜜のあるものだつた。

空虚の中でききてきた自分にとつて、これほどまでに誰かを感じたことなど無かつた。

人間など、自分たちにとつての糧かてでしかなかつたはずなのに。

「リンの傍にいると、今まで感じなかつた餓えが酷くなつてしまふのだ……」

お前の血が欲しい、と。

その本能は、己の生命が脅おびやかされるほどに酷くなつていいくと言つ。残り少ない時間の中で、自分は凜にとつて化け物以外の何者でもなかつた。

守りたいのに欲してしまう。

大切にしたいのに奪いたい。

本能と理性がせめぎ合つ中で、異形である自分はいつか本能が打ち勝つだろう。

僅かに触れた甘い血。

その血を得た瞬間、震えるほど満たされていくを感じてしまつた。

もつと。

深く。

その身を擣げる。

自分の中の獸がそつ囁くのを確かに聞いてしまったのだ。

「エイ」

「はい」

「私は…………間違つて、いるのだらうか？」

「……はい、そうですね」

濶みなく答える臣下に、僅かにピクリと反応してしまつ。しかし、強靭な精神を持つエイは、表情を変えることなく淡々と続けた。

「しかし、私にも出来ませんでした」

「……？　どういうことだ」

「あなた様よりも先に、この子供を抹殺するより指示が出ておりました」

「……！　元老院か」

元老院。全ての一族を束ねる組織。

自分をこの屋敷という名の牢獄に閉じ込めたのも、かつて一族のものを消すことを決めたのも、力に溺れたものたちだった。

「はい。消したのち、その躯と共に納めることであなた様の力を取り戻し、元老院がその力を利用しようとした模様です」

「……」

あのクソたぬきジジイどもめ、と毒吐きたい気持ちでいっぱいだったがグッと堪える。

今はそのようなことを言つてゐる場合ではなかつた。

「けれど、不思議な子ですね。私がフェルーナ様を閉じ込めている元凶であると分かっているようでしたが、あなた様に向けるものと同じように笑つておりました」

「分かつていた、だと？」

「はい。私がフェルーナ様の監視者であるのか、と……同じような意味合いで問われたことがあります」

「子供だと思っていたが、意外にも良く見ていてるのだな」

困ったヤツだな、と少し笑いながら、そつとその頬に触れた。

子供特有のふっくらとした柔らかい頬。

閉じたままの瞼の下には、真っ直ぐに自分を見つめる漆黒の瞳があるはずだった。

早く目を覚まして欲しい。

もう一度、その瞳で自分を見つめて欲しい。

厭わしいと思つたばかりのその視線が、今では恋しくて仕方なかつた。

「ええ、そうなのです。私がそれを聞いた瞬間、躊躇つているのに気が付いたのか、何事もなかつたかのように笑いかけておりました」「それで、お前は殺り損ねた、と言い訳するのだな」

「……いいえ。戦意が削がれただけです」

フイと素知らぬ顔をするこの配下など見たことがなかつた。もう一人の使い魔など、驚きすぎて固まっている。

「まあ良い。お前が「レを欲したとしても、それは叶わぬことだからな」

「……元より承知でござります」

「そうか。ならば、エイ、カナメ」

「はい」

「……はい」

「私はこの地では無く、別の地で最期を迎える。リンが復調次第、移動を命ずる。すぐに準備に掛かれ」

「「御意に」」

元老院を納得させ、屋敷を移動させる」とは面倒でもあり、多少の困難はあるだろう。

しかし。

「お前を納得させる」との方が難しいと思つのは、何故なのだろう  
な……リン」

あと少しだけ。

もうしばらくは傍にいてさせて欲しい、とその愛しい子供の額に口付けを落とした。

田が覚めると、いつもとは違つ面白い豪華な壁が見えた。

「うーん、と寝返りをすると、さらりとした気持ちの良いシーツが肌をくすぐった。

「あれ、なんでおれ、ねてたんだろ？……でかここ、シユーランのおやしき？」

何故自分がシユーランの屋敷の部屋で寝ていたのか分からず、伸びをしながら周囲を見回した。

するとすぐに、かたわ傍らに座つたまま眠るシユーランの姿が見えた。

「シユーラン……？ こんなところでねてたら、かぜひこちやうよ？」

いつも自分が注意されていることに、シユーランつてば人のこと言えないじゃん。と思いつつも、さつきまで包まれていたシーツを引っ張つて、シユーランの肩に無理やり掛けた。

「うーん、ショッヒ。これでいいかな？ シユーランがねてるなんて、めずらしー」

しげしげと物珍しいものを見つけたように、のんびりと観察をする。

といふか、この人が眠っているのを初めて見た。

いつも会うのは昼過ぎから夕方にかけてだし、たまに朝早くに来ても、いつだって起きていた。

寝起きで寝ぼけたところなんて見たこともないし、そもそも寝て

いるシユーランを想像したことがない。自分はいつも、天気の良い日は桜の木の下でお弁当を食べて、ウトウトしてしまったり、そのまま寝ていたりすることなんて日常茶飯事だ。

時折、じつしてお屋敷の部屋までシユーランが運んでくれる」ともあつたくらいだ。

「あれ……おれ、なにしてたんだつけ？」

確か、今日は泊まって行つても良いと言われ、夕飯を食べた後で星を見に外に出たよくな……そこからの記憶が全く出て来なかつた。

「まあ、いつか。そーだ！　エイセーん、カナメ～」

パタパタと駆け足で扉を開け、屋敷のどこかにいる一人の名を呼ぶと、すぐにエイが姿を現した。

「リンさん、どうされたのですか？」

「もおー！　さん、とかやめてつていつもゆつてるのに……あとでいねいなのもダメっ」

「ああ、すみません、クセなものにして。では、リン。どうかしたのか？」

「うんっ、それでいいよつ。あのね、シユーランがめずらしくねちやつてるの。かぜひかないかしんぱいで……」

なんとかして？　と頼むと、エイは柔らかく微笑を浮かべると、すぐに部屋の中へと滑り込んでいった。

「ボクを呼んだりした？　リンちゃん」

「あ、カナメ！」

「何でボクだけ呼び捨てなのやー！　ハイだけ巣廻<sup>ひこき</sup>しそうじやない？　リンちゃんつてば！」

「だつて、カナメつてばじつもおれのijと『りちゃん』づけすんだもん。やめてくれたらかんがえるよー」

「だつてコンちゃんはコンちゃんでしょ、うへ。」

「ちがうしー　おれおとこだしー！　まあいいや、そんなことよりわあー」

おれびうしたんだつけ、と聞いひとした瞬間、バタン…！　ともに凄い音と共に扉が開かれた。

「リン…！」

「あれ、ショーラン、おきたの？」

のんびりとした口調で、かぜひかなかつた？　と叫げる前に、そのまま広い胸の中に囚われた。

「うわー！」

「リンッ、この馬鹿者が…！」

「えつ？　ええつ？　ちょつ、じうしたの、ショーランつー苦しいよ……つー」

よく分からぬままぎゅうぎゅうと抱きあくめられ、抵抗する気も起きずにつぶされがままになっていた。

けれど窒息死するのは嫌だったの、ぽかぽかとその胸を叩いて力を緩めてもうひ。

それでも一向に離してくれる気配がなかったので、足らない短い腕をぎゅっとその背に回して抱きしめ返した。

「ショーラン……？　だいじょうぶ？　じつか痛いの……？」

「それは私の台詞だ、『』の馬鹿……。」

「ええ～なんでー？」

抱きしめられたと思つたら怒鳴られた。

なんでおこられてんのー？

うーん、と考えても分からなかつたので、とりあえず謝つておくれ」とした。

「よくおぼえてないんだけど……『』めんね？」

「お前が謝るなっ」

「うえーん……ますますいみがわかなないよ～シユーラあ～ン」

半ばベンをかきながら抗議するけれど、教えてくれなさそうだった。

助けを求めようとエイとカナメに視線を向けるけれど、エイは云々と頷いているだけだし、カナメに至つては呆れたような顔をされた。

……だからなんでー？

「『』も痛くないのだなー？」

「ふえ……うん、おれはいつでも『』んきだよつ」

「ううか…。頭がふら付いたり、『』か具合が悪い部分はないのか

？」

やたらと心配してくるシユーランが不思議で仕方がなかつたけれど、『』も変わったところはないと教えてあげる。

こつもならへんなのって言つところだけど、ちやんと言わないけど、とにかくてしまいそつなくらシユーランの様子がおかしかつたから。

「うん、だいじゅーふ。けど……」

「けど、なんだ!?」

「えっと、おれ……ねちやつまのいじ、おせえでなこんだが……

……おれ、なんかしちゃった?」

「……いー。」

正直に告げると、自分を抱きしめていた腕がピクリと震えるのが伝わってきた。

……やつぱり何か迷惑を掛けてしまつたのだろつか。  
不安になつてショーランを見上げると、巨體のヒヅキに眉間にしわを寄せていた。

「ショーラン? やつぱりおれ、めいわくかけちやつたの?..」

「……ああ、いや、そうではないのだ。お前のいじが迷惑な感じつけたことは一度たりてない」

「やつなの?..」

ちゃんとん、と見つめて問うけれど、難しそうな顔をしたままのショーランが不思議でならなかつた。

自分が迷惑を掛けたわけではなくこのなり、ヒヅキもそんなに苦しそうな表情をしているのだらつ。

「ああ。だから、今日はもう寝てこなさい。身体に障る」

「ええーー! セつかくショーランところの、ねるなんてもつたいなこよーー。」

「なりぬ。あとで話でもしてやる。だから今はベッドに寝つなさい」

「いー。」

「いー。」

「私はケチなどではないつ。早くせぬなり。早くせぬなり。舌つ付けて数日遊んでなぞやらぬわ」

「うえええええええ、それはいやつ！ わかつたつ、わかつたからべっどにしばるのはやめてえええええええ！」

「わかつたのなら良い。カナメ、リンを部屋へ連れて行け。私はエイと話がある」

「なんでボクが……つてハイツ！ 分かりましたからすぐにモノを投げるのは止めてくださいよおおおおー！」

ぎゃー、ぎゃー騒ぎながら急いで部屋へと向かう。

この際、シユーランの怒りはカナメ一人が受ければいいよな、と薄情にもカナメを見捨てることにした。

だつて怒ったときのシユーランつてホントまじで怖いんだもん。ガシャンとモノが飛ぶ音を聞きながら、走つて部屋へと戻つていった。

執務室とは名ばかりの、書斎代わりの小さめの部屋にエイを呼びつけた。

ほとんど使われていない大きな机に手を置きながら、これから事を思う。

幸いにも、自身の血を使つたことによる弊害は今のところ起きていないようだつた。

眠り続ける凛が心配でならなかつたが、もう大丈夫そうだ。仮にもし、何か異変が起きたとしても、魂の誓約がすぐさま口に伝えてくるだらう。

もう傍に、いる必要など何処にも無かつた。

「明日、だ。明日の宵、リンに全てを話す」

「……御意」

「あの子は……怒るだらうか」

「…分かりません。しかし」

「だが、なんだ」

「リンさんは、レイン様の血族と陰陽の娘一族の血を受け継ぐ唯一の者。……レイン様が魔女であるフェルーナ様の母君を受け入れたのなら、同じように全てを受け入れるようになります」

「……そうか。皮肉なものだな」

そつと、部屋の窓から見える、屋敷の庭に大きく聳え立つ大木を見つめた。

かの血族である凛の血を僅かにでも得たためなのだろう。

以前よりも力を増し、より強く咲き誇る紅色の華。

自身を呪つた一族の血と、自身の一族を愛した一族。

その両方を兼ね備えた唯一の子供。

心はその存在を欲して止まないのに、身体はその血を奪わなければならぬ。

その矛盾が、こんなにも己おのを蝕むなどと思つてもみなかつた。

それでも。

「出会いわなければ良かつたなどと思えない私は、もう妖あやかしでも人間でもない、ただの異形なのだろうな」

零した言葉に、エイは答えられなかつた。

翌日。

ようやくベッドから開放されて、こつものよつこシユーランヒーと一緒に大木の下でまつたりとしていた。

変わった御伽噺おとわばなしをしてもらつたり、ハイが作ったおやつと一緒に食べたり。

その中でも「ロロロロしながら髪を撫でてもひつのが一番好きな時聞だつた。

「シユーランのかみひて、なんでこんなにキラキラしてるんだらーね」

せりうとした手触りが気持ちよくて、ずっと触れていたいの、元のままにもサラサラとしずきてあつとこつ間に手の中から零れ落ちてしまつ。

何度も試してみるけれど、やつぱり掴むことが出来なかつた。

「……何をそんなにムキになつてこるのだ？」

「だつて、とつてもキレイだから。シユーランヒーにさうしてこんなにキレイなの？」

至つて普通に疑問に思つていたことを口にするヒー、シユーランは困つたよつな笑みを浮かべて母親譲りの真つ黒な髪を優しく撫でてくれた。

「私は、綺麗などではない。むしろ、お前の方がよつほど綺麗だ。この漆黒の髪も、その身も、その心も……私には、眩しいほどだ」

そういうて、少し目を細めて見つめてくるけれど、自分が綺麗だなんて納得がいかなかつた。

自分に向けてくる優しい視線も笑顔も、綺麗以外にどう表現してこのか分からないうら、キラキラして、どうしてか分からないけどもキドキもした。

「…………『ジ』がだよ？ おれ、キレイよりカッコイイがいいになつ」「くつくつくつ。お前は相変わらず面白いな」

「ええ！？ なんでだよ！？」

意味わかんない、と苦情を出すけれど、笑つてばかりで答えてはくれなかつた。

「さて、やるそろ日も暮れる。……もうおうちへお帰り」「やだつ。もつとショーランと一緒にいたいし遊びたいよつー」「ふふ……困ったヤツだな。いつか、お前も私のことを忘れてしまうのに」

「そんなことない！ なんていきなりにそんなこと言つんだよ！？ だつてショーランはいつもおれとあそんでくれてるじゃん。おれ、ショーランのこと、わすれたりなんてしないつー」

こつもだつたらそんなこと言わないのに、どうして總て突き放すようなことを言うのだろう。

このまま別れてしまつたら、もう一度と会えないよつな気がして怖かつた。

「ね、『やくそく』してつ。ずっとずっと、えいえんに、こつしょにいられる『やくそく』」

「永遠に？」

「うんつ。おれ、ショーランのことだけすきだもん。ずっとずっと、

いつしょにいたい。オトナになつても、それからも

「お前が大人になつても、か……」

その時まで、自分は生きていられるのだろうか……と呟いた声に、  
気がつくことが出来なかつた。

「おれ、シュー・ランのイチバンでいたい。……だめ?」

懸命に、そり……絶対に譲れない、シュー・ランが大好きという気持ちを言葉にするけれど、まだ幼い自分では上手く伝えられなかつた。

それでもどうしても一緒にいたくて、傍にいたくて。

『永遠』なんて不確かな言葉を口にするしか無かつた。

「お前が私の一番になつてしまつたら、困るのはお前の方なの……」

「なんであつゆー」「ト、うんだけよ。おれのこと、そんなにキレイだつたのかつ?」

「そうではない。お前が嫌いだとかそういうことなのではなくて……ただ、私は……」

ヴァンパイア、なんだ。お前と共に生きる

には、支払う代償が大きすぎる

「ばんぱいあ……?」

聞いたことのない言葉。

それが何だというのだろうか。

別にシュー・ランが何であるうと、自分には関係ない。そう言おつとしたけれど、「やつではないのだ」と制止されてしまった。

「リン、良く聞きなさい。私やエイは、ヴァンパイアという妖……、人ではない存在なのだ」

「あやかし

「人じや、ない……？」

人じやないものって何だらう？と思つけれど、答えは出てこなかつた。

「そうだ。私たち異形は、人間の血や精を力としている。睡眠もほんдин必要としないし、食事も本来は口にしない。つまり……人の生命力が、私にとつての食事であり睡眠なのだ」

「人が……ゴハン……」

「そう。このまま一緒にいれば、いずれ私はお前を食事にするかも知れないので。そんなお前と生を共にすることは難しい……すまない、リン」

言われたことが難しくて良くわからない。

けれど、このままじゃもう会つてくれなくなるかもしれない。  
それだけは、どんなことをしても嫌だつた。

ゴハンが必要なら、自分がそうなれば良い。

血の氣は多いほうだし、痛いのは嫌だけど、シユーランと一緒にいられるなら我慢する。

何でもする　　そう自分で答へが出るのは早かつた。

「それでもいい。シユーランといつしょにいられるなら、おれがゴハンになる。いのちと、シユーランのこいがいだつたら、おれがもつてるものぜんぶ、シユーランにあげるから」

「リン……」

「おれのもつてるものなんて、ぜんぜんすくないけど。でも、それでもおれにとつてはシユーランがイチバンだから。いのちがひとつうだつていうなら、あげるから。だからそれまでは、いつしょにいたいよ」

離れるなんて絶対に嫌だ。

傍にいてくれるなら自分は何だつてする。

他にどう伝えたらいいのか分からなくて、ぽろぽろと涙が込み上げて来るけれど、男は泣くもんじやないと必死に言い聞かせ、袖口で拭ぬぐつた。

「リン、まぶた瞼が腫れるから止めなさい」

「……つ、だつてえ……ひつく……つ」

どうしても嫌なんだもん、と黙々をこねると、涙を拭うようになハタハタりながら唇が当たられた。

「シユーラン……？」

「本当にお前は……困ったヤツだな。一度だつて私の思つ通りになハタハタりなつてくれない」

ちゅっと軽く零れた涙を吸われ、優しく頭を撫でられる。  
さつきまでの難しい雰囲気は何処かへと消え失せ、いつも以上に温かい空気を纏まとって頬に触れてくれた。

「分かつた。それじゃあ約束をしよう

「やくそく……？」

「ああ。私は今から、お前の中にある私との記憶を消す。お前が大人になつて、それでも私のことを思い出すことが出来たならば、私はお前の一番になハタハタり」

「ホントウー？」

「もちろん。ただし……」

「ただし？」

「お前が十七を迎える刻ときまでだ。それを過ぎたら、私はお前に関する一切のことを忘れよう。それでもいいのか……？」

何で十七なんて中途半端なつて言つたら怒られた。  
僅かでもこの人と一緒にいられるのなら、何だつてするし、出来  
るような気がした。

「わかった。『やぐれぐ』するつ

そうして俺は、約束をしたんだ。

この人と一緒に生きるために。

## 第一十一話（後書き）

みづやく過去編が終わるとなります。

場面移動がわかりにくくて申し訳ないです。

誤字脱字報告、感想・評価など、よろしくお願ひ致します！

また、随時活動報告の方にも情報掲載しておりますので、ぜひぜひ遊びにきてくださいね！

どれくらいの間、そうしていたのだろう。

辺りを照らす光は星の瞬き以外他にはなく、暗闇に慣れた瞳でさえも互いの顔を近くで認識出来る程度だった。

鷹司先輩はじっと自分を抱きしめたまま動こうとはしない。耳元をくすぐる吐息と、夜風を舞う音だけが周囲を支配していた。真紅の花びらがひらひらと踊り、まるで意思があるかのように自分が鷹司先輩の周りを舞っていた。

突然フラッシュバックされた過去。

どうして急に、あんなことを思い出せたのだろうか。

ずっと会いたかったのに、ずっと知りたかったことが分かったのに、どうしてシユーランよりも目の前のこの人が気になってしまっているんだろう。

自分で自分の気持ちが、分からなくなっていた。

(本当に知りたいのは……この人?)

そんな馬鹿な。

確かに知りたいとは思つたけれど、自分にとつての一番はシユーラン以外ありえないのに。

(どうして……俺、こんなにも……迷つてるんだよ)

グラグラと揺れる自身の精神。

シユーランがヴァンパイアで、目の前のこの人もそれっぽいのなら、何処かで一人は繋がっているのは確かだ。英先輩も、四柳院も。

姿形は当時と違つてゐるけれど、人でない存在なら変えることも容易なことなのかもしない。

でも今はそのことよりも、不安げに自分を抱きしめる腕が気になつて仕方がなかつた。

「センパイ……？　だいじょうぶ……ですか…？」

自由な方の腕を回して、そつと優しくその背を撫でる。繋がれたままの手を伸ばして軽く触れ、僅かに震えるその手を暖めた。

(何だか……あの時みたいだ)

思い出したばかりの記憶と現在<sup>いま</sup>が交差する。

この状況が既視感<sup>デジャヴュ</sup>を生み出し、事実あつたことだった。

あの時と同じように、目の前のこの人は何かを迷つよつとしている。

「俺に、どうして欲しいですか……？」

「……」

半ば確信を持つように問いかけると、鷹司先輩はピクリと肩を震わせた。

何かを恐れるよつ。

何かを知つてゐるかのよつ。

「僕にそんなことを言つていいの……？」

「え……」

「その身体が欲しい、その心が欲しつて言つたら、キミは僕に全部くれるの

「…………何、を」

言つてゐるのか分からぬ、と告げる前にぐいと髪を引つ張られ、強引に上向かされた。

痛みを感じてゐるのは自分なのに、そつとせめてこの鷹司先輩の方が何故か辛そうにこちらを見つめていた。

(どうしてそんな顔をしてるんだよ……?)

教えて欲しい。

自分を欲しがる気持ちも、その心中で何を隠してゐるかも。辛いならそう言つてくれればいいのに。

今まで思つたりしたいこと全部、自分勝手にやつてきたくせに。どうして今更そんな顔をするんだろう。

(そうだよ、俺なんかじゃなくともいいじゃん。他にいっぽいハーレムの連中がいるんだから、そいつらだつて構わないくせに……)

そう自分に言い訳するけれど、本当は違うことくらい……もう分かつっていた。

補習の代わりと称して生徒会の手伝いをし始めた時から、この人がそういう人たちと遊んでいるところをほとんど見たことがない。夏休み中もいつも何処かへ姿を消すけれど、いつだつてちゃんと仕事をしていた。

自分はもう……この人のことを信頼しているくせに、意地つ張りな心がそれを認めたがらなかつただけだ。

自分がだけだと、言つて欲しくて。

「どう……して?」

「何……?」

「センパイは、どうして俺なんかを欲しがるんですか……？　俺、センパイのことが分からぬ。けど、分からぬことをそのままになんてしておきたくないし、センパイにしてあげられることがあるのなら、なるべくしてあげたいって思います。全部と言わわれてもどうすればいいのか分からないし、分からないからどうすれば良いのか分からぬけど……でも、ちゃんと分かりたいって思います」

「リン……」

「俺、さつきいましたよね？」『センパイのこと知りたい』って。だから、ちゃんと教えてください。寂しいなら寂しいって言つてくれださい。特別に何かは出来なくとも、傍にいる」とくらいなら出来ます

これが本当の気持ち。

誤魔化したりしてちゃんと向き合つて来なかつた、本音。シユーランのように何処か寂しげなこの人が、知りたいんだ。振り回されるだけじゃなくて。流されるんじやなくて。

本当のこの人を見たい。

「俺、今ならアンタのこと……ちゃんと、見れると思つんですね」「…………つ」

僕自身を見て欲しい。

以前、そう言つていたこの人。その時の自分は、シユーランのことで頭がいっぱい、それ以外のことなんて何も考えられなかつた。だけど今なら違う。

シユーランはもちろん大切な存在だけど、この人のこともきちんと考へなくちゃいけないんだつてことが……もう分かつてしまつたから。

「リンは……優しいね」

「……は？」

不意に掴んでいた手を放し、解放される。

ガクンと後ろに倒れそうになるけれど、寸でのところで耐え切った。

相変わらず問いかねには答えてくれず、困ったような笑みを向けられるけれどどうすればいいのか分からぬ。

戸惑うこちらには気にも止めず、制服のズボンのポケットから鍵を取り出した。

「な……んで」

ソレを持っているんだ？

そう問いかける前に、シャランと繋がれた枷を解いた。

手首は自由になつたけれど、心はそれに付いていけていない。

立ち止まつたまま鷹司先輩を見上げると、何処かを諦めるような微笑みを浮かべていた。

「僕はリン……キミが好きだと、言つたね」

「……はい」

確かに、言われた。

冗談だと思っていた言葉。

からかわれているんだと思つていたその台詞。

だからそれに対する答えを今、持ち合わせてなどいなかつた。

答えないことが分かつてゐるよつと、鷹司先輩は何も追求してこない。

それでいいのだと……ずっと甘えていた。

「けどね、僕は……」

一瞬、低くなつた声にドキリとする。

「同情で好かれるほど、落胆ぶれてはいなんだよ」

「え……？」

「キミが哀れな化け物のために心を痛める必要なんか……何処にもないんだ」

「ちょっと……なに、言つて」

「優しいキミが確かに好きだつたけど……優しさは時に残酷なんだよ

「……つ、覚えておいて」

「……つ、センパイ！」

じゃあ、と去つて行く先輩は、まるで別人のようご冷たく感じられた。

さつきまで触れられていた箇所は、夜風に攢くらべわれて温度をなくしていく。

それと同時に遠ざかる先輩を追いかけことは……出来なかつた。

「もう……つ、意味が、わかんないよ……つー」

何もかもがぐちゃぐちゃで、分かることなんて何も無かつた。

知りたいと願つた自分。  
教えてはくれない先輩。

全てを知つているのかのように咲き誇る桜は  
していくかのように、真紅から薄紅色へと変わっていく。  
その心が離れていく

「知りたいって願っちゃ……いけなかつたのかよ……っ！」

シュー・ラン！！

昔も今も、上手く生きられない自分が……無性に腹立たしかつた。

## 第一十一話（後書き）

おかげ様でユニークアクセス数が6000人を突破いたしました！  
本当にありがとうございます！！

これもひとえに、気長に待つていてくださる読者さまのおかげです  
！！

活動報告のほうでは現実での活動などを記載しておきますので、よ  
ろしけつたら遊びに来てくださいね

第一二三話（前書き）

お待たせいたしました。

ようやく復帰出来そうです。

少々無理やり感が否めませんが。

楽しんでいただけたら幸いです。

。 。

人生は、どうしてこんなにもままならないんだろう。  
目の前にある大切なものを守れず、手にしようとした途端にあ  
つけなく消えていく。

僅かな時間の中を自分なりに生きてきたつもりだったけれど、結  
局何一つ、この手に掴むことさえ出来なかつた。

「どうちも大切、だなんて……我慢だよな」

同情なんかじゃない、好きだ、って、とっさに言えなかつた。  
好き……？

自分は、あの人のことを、シュー・ランのように好きだつたのだろうか。

いや、好きだつた、ではなく、好きだ、の間違いかもしれない。  
そうでなくちゃ、この胸の中を荒ぶる感情に説明が付けられない  
かも知れないからだ。

「……は、あはは……俺つてなんて馬鹿なんだろ……つ」

失つてから、恋をしていたことに気がつくなんて。

「どうして欲しい、なんて言わなきや良かつた……」

そこに自分の意思なんて無かつた。

他人に自分の行動を求めるなんて、失礼にもほどがあるんだけど、  
今になつて気がつく。

それよりも先に　自分がどうしたいのかを理解していくなく

ちやいけなかつたのに。

「いかな、きや……っ！」

今ならまだ間に合うかもしれない。  
自分の気持ちに、まだ整理が付いていないのは本当だ。  
だけど。

「IJのままなんて、そんなの絶対ダメだ」

後悔したくない。  
また、大切な人を失いたくなんてない。  
我儘でも、理不尽な気持ちとしても。  
何もしないまま諦めるなんてこと、出来るはずがなかつた。

暗闇の中を注意しながらも最速で駆け抜けていく。  
焦る気持ちと、自覚したばかりの気持ちを胸に抱きしめながら、  
どこにいるかも分からぬ天邪鬼な男の影を追つていた。

（何ですか……なんて、そんなのわかんない。だけど、そんなのどうでもいいんだ）

この気持ちが、恋とか愛とか、そんな言葉で括れるようなものなんかじやなくつても。

（ただ傍に……）

いたらたら。

「へ、わあっ」

足元を遮るのは、先輩があらかじめ用意したであろうトラップの数々。

ネズミ捕りのような原始的なものもあれば、タイミングよく飛び出していくお化け（のよつなもの）など様々だ。  
なんでもこんなものを、と思つけれど、だからと書つて悔つてはいけない。

原始的なものはそれなりに有効だからこそ、考へ出されたものなのだから。

そういうふうに、油断すればすぐに引っかかるてしまいそうだ。

そのせいで走るスピードな否応なしに減速することを免れないし、だからこそこその罠がある意味があるんだるつとも思へ。

「そんなところまで考へなくつてもいいの……よつ、と」

ぴょんとタイミング良く避けながらも、段々と慣れてきてスピードを上げていく。

一つもトラップが発動されていないけれど、なんとなく、じつちの方を彼が通つたような気がしていた。

「つか」「く」てもう肝試しの域を超えてんじゃね？ つて……ちよ  
つ、あぶねつー！」

最早一つのアトラクションと化してきた障害物の多さに辟易しながらも、何だか楽しく感じてるのは何故だろう。

もしも一人で一緒にココを通つていたのなら、文句を言つ自分と、笑いながら軽々と諫めてくる先輩の姿が簡単に思い浮かぶ。

何だからいいながらも、一緒にいて楽しかったんだと今になつてようやく自覚した。

「どうあえず、見つけたら文句の一つでも言つてやらな」とな

もう一度心にやう強く決めて、よひやく見えてきたゴールへと駆け抜けていった。

「センパイっ！」

寂しげに佇む鷹司先輩を見つけると、いてもたってもいられずに俺は叫んだ。

ゆづくつと振り向く先輩の瞳は、冷たい非難の色と怒りに染まつているように見えた。

だけどそんなことは俺には関係なんてない。

どれだけ嫌がられようと、罵倒されようと、自分のしたいことをするまで俺は引き下がることなんて出来なかつた。

「……何しにきたの？ キミの顔なんて、見たくなんてないんだけど」

「つ……」

当然のように放たれる射抜くような冷たい視線と言葉。

だけどそれでも、俺は言わなくちゃだめなんだ。

グッと唇を噛み締め、いろんな思いが交差する心をなんとかなだめて先輩へと向き合つ。

ゆづくと呼吸を落ち着かせて、一度だけ確かめるよつて深呼吸をした。

「一言だけ、言わせてください」

懇願するよつて、だけど揺るがない決意を見せるよつて、そつと言葉と紡いだ。

「俺は、同情なんかじゃなくて、今までアンタと一緒にいて楽しかった。だから、これからも一緒にいて欲しいと思つてる」「…………つ！」

「俺には確かに、アンタとは別の人があつと好きだったよ。それは今も……そうなのかも知れない。卑怯だつて、ズルイつて自分でも分かつてるけど、だけどそれでも、その人と同じくらいい、アンタのことも好きなんだ」

俺のしたいこと。  
して欲しいこと。

それは誰が見ても理不尽で、我儘な言い分だつてことは分かつて  
る。

だけどそれでも。

「それが、俺の心からの本心なんだ」

嘘偽りの無い、気持ち。

どれだけ矛盾していることを言つて居るのか、そんなの誰に言わ  
れなくとも分かつてゐる。

本当は今だつてシユーランを諦めるこことなんて出来なくて。  
だけど鷹司先輩を失うことも嫌で。

そんな到底叶うハズのない願いだつて分かつてゐるけれど。

だからと言つて、簡単に選べぬ迷いが失つ」との出来ない、大切な……想い。

「……クツ、ふふふ……」

唐突に笑い始める鷹司先輩に困惑の視線を向けるけれど、尚も止まるこことなく笑い続けている。

「……？ 僕、なんかへんなこと言つたつけー？」

「クククッ……はつ、まいつたね」

「はいッ！？」

「どうしてキミは……そんなにも、強いんだろうね」

「……言つてる意味が全然まつたく分かりませんよ……」

なんでアンタはいつもそつなんだ……と突っ込みを入れるけれど、いつものような雰囲気が流れ少しあくびくなつた。

止めて無駄なので放つておくと、やがて諦めたように笑い声が収まつた。

「……おいで、僕の凛。キミ、愚かな男の話をしてもあげよ」

不意に真剣な眼差しを向けられて、ゆうくつとその手を差し出された。

答えは返つて来ていなければ、その手が答えるような気がした。俺はそつと腕を伸ばして、少しばかり緊張しながらその手を取つた。

「うわー」

グイと強引に引っ張られて、胸の中に抱き込まれる。

さっきまでの態度は一体なんだつたのかと思つぽど、回された腕は優しかつた。

触れられる感触が、今までと違つて思えるのは何でだろ？

意識した途端にドキドキしていいる俺のことなどお構いなしに、鷹司先輩はぎゅっと俺を抱きしめた。

「ちょっとだけ、貰つてもいいかな」

「へっ！？ な、何を……、ですか」

「キミの中を流れる……その甘美な、血。」

「えつ、はいっ？ えーっと……」

突然のことで思考が混乱しかけたけれど、先輩もヴァンパイアなのだから（と勝手に思つて）まあ仕方がないかなとも思つた。

「俺ので良いのなら……どうぞ？」

「良かつた。それじゃあ……ちょっとだけ、チクッつてするけど、我慢してね」

「はあ……、っ、いたつ」

抱きしめられた腕に力がこもると同時に、首筋に針が刺さるような鋭い痛みが一瞬だけ走つた。顔の辺りを先輩の髪が擦つていてを感じるので、俗に言う吸血行為がされているのだろう。

（……なんか恥ずかしい体制じゃね？ もしかして……）

「うわあ～、誰にも見つかりたくないこんな現場……と一人妄想に耽つていたけれど、すぐに先輩はその行為を止めた。

「……もう、いいんですか？」

「ん、ああ……大丈夫。痛くなかった？」

「それは、まあ。つて……ん！」

人が話しているのに舐めるなよっ！

あらうことか、噛み付いたその首筋に舌を這わそそうとしてくる（といふか既に舐められてる）先輩の頭を抑えようとするけれど、時折ゾクゾクとする感覚が慣れなくて腕に力が入らなかつた。

「ちょっと、もう……止めろつてばっ……」

「ふふつ、可愛いね、凛」

「可愛くなくていいから舐めるなつての……っ！」

「残念。もうちょっと、味わっていたかったのに」

全然悪びれもなく楽しげに笑われると、腹が立つけど呆れるまつが先に来るのは何故なんだ。

ガツクシのような垂れる俺を余所に、ちゅつともう一度だけ舐め取ると、先ほどよりも妖艶な笑みを浮かべて唇にも口付けを落とした。

「ん……っ」

「じけそうさま。凛から元気を貰つたことだし、行こうか

「は？ 行くつて……どこへ？」

「行けば分かるから。しつかり掴まつてね

「えつ、ちょっと、うわっ」

その瞬間、強烈な浮遊感が身体を襲つた。

思わず目をぎゅっと瞑つてその衝撃に耐えていると、やがてそれは收まり、地面に足が着くのを感じた。

そつと瞳を開けると、そこに広がっていたものに驚愕した。

「な……んで、いー」

「さあ、おいで。お茶でも飲みながら、話してあげるから」

相変わらずマイペースに進む先輩に引っ張られながら、その中へと入っていった。

「だつて、ここは……」

そう。

そこは。

その場所は、いつかの宝物のような日々を過ごした  
ーランの館、だつた。

シユ

扉を開けると、いつか見た風景と変わりない景色が飛び込んでき  
た。

広い大きなエントランスに、豪奢なシャンデリア。洋風を中心と  
した煌びやかな内装は、遜色褪せることなく華やかなままだ。中央  
に位置する幅広の階段は、小さな頃に転げ落ちてみんなを心配させ  
たような記憶がある。

「エイ、カナメ」

鷹司先輩が慣れた口調で一人の名を呼ぶと、制服姿ではなく、ま  
るで執事のような白いシャツと黒いタイ、同じ色のスラックスにベ  
ストを身に付けた英先輩と四柳院が現れた。

「「！」」「」

恭しく頭かしらべを垂れて、きつちりと礼をする一人。

そんな一人の様子に戸惑いながらも、どこかで納得している自分  
がいた。

「あの部屋へ入る。私とリンクが入ったのち、厳重に結界を張れ。内  
側から壊すまで、何人たりとも進入を許さぬ。よいな」

「……なつ、それは……！ フェルーナ様！」

「反論は許さぬ、カナメ。エイ、後を頼む」

「私としても、反対を申し上げたいところですが……良いでしょ？」

御意に、我が主

声を上げる四柳院を制止し、英先輩が受諾すると、四柳院もそれに従つた。

俺はどじつ反応したら良このかわからず、ただそのやり取りを見守つていた。

その答えはさつと、今から分かるだろうから。

「リン、おこで。『約束』を、守り

鷹司先輩の言葉に無言で頷いて、その足が向かう部屋へと入つていつた。

見覚えのある、ひんやりとした室内。  
どこかで見た白い壁。

その先には、いつか目覚めたシユーランの部屋だった。

豪華なベッドには幕が下ろされているけれど、誰かがいるのを感じた。

力チャン、と扉が完全に閉まるのを確かめると、ピンと張り詰めた空気が周囲を覆つたような気がした。もしかしたら、わざと言つていた結界といつやつなのかもしれない。

「センパイ……？」

果然と立ち尽くすしか出来ない俺は、この後どじつすればいいのか分からず先輩へと声を掛ける。

穏やかな……どこか決意をしたように見て取れる先輩の表情が、やけに印象的だった。

「『あんな、リン。僕はずつと、キミを振り回してばかりだった。

どうしてもキミが欲しくて……忘れられなくて。僕の我慢が、キミの人生を狂わせてしまったんだ」

「え？」

「だけどキミは、果たされてはいけない約束を守つてしまつたんだ。だから僕は……明かさなくてはいけない。哀れな男の結末を。キミの血に隠された

真実を

「しん……じつ？」

一体何を、と尋ねる前に、目の前の布が捲くられる。

目にしたものは、人形のように美しく、まったく生が感じられない男の姿だった。

銀の美しい髪。透けるように白い肌。長い睫毛に真っ直ぐに通つた鼻筋。

閉じられたままの瞼の奥には、同じように綺麗な瞳があるのだろう。

左右で異なる、美しい色をした瞳が。

「シユ……ラン？」

ともすれば衰弱しているかのよにも見える、求め続けていた人の変わり果てた姿。

ただ眠っているようにも見えるけれど、この人が眠っているハズがない。

「どうして……」

眠らないはずの彼が、何故ベッドに横たわっているのだろう。やつと会えた喜びよりも、不安と恐怖が襲つた。

ふいに鷹司先輩のほうを見ると、申し訳なさそうな……どこか苦しげな表情で微笑んでいた。

「まあせせせ話からしそうか。」  
「座つて、お座つ

もうこつて、俺をベッドの傍にあるソファへ促すと、鷹司先輩も向かい合わせの形になるようて座つた。

「むかーし、昔。今よりもずーっと遠い昔。あれこそ、キミがまだ私や、この男と出会うよつも、キミが生まれるよつずつと過去に時間を使らなければならんじんだ」

そう切り出して、先輩はどこか物語を話すような口調で語りだした。

山奥の中にはひとつひとと、村とも呼べないよつな部落がそこにはあった。私の母はその部落とは離れたもつと奥深い森の中で、ほとんど人と会つことなく静かに過ごしていた。

ある時、少年が部落で禁止されていた区域へと入り込んでしまっていた。

母はそれを侵略行為として諫めようと姿を現し、その者に警告を発した。

「部落の者よ。ここは我らが一族の領域。早々に立ち去るが良い」

「…？」

「……我らと盟約と結んだことを忘れたとは言わせない。我らがこの地を治める代わりに不干渉であることを。もはや、これ以上の愚行を許す気はないぞ」

「…………さか、貴女が森の、魔女？」

「ふう……なんだ、唯の迷子かゆえ？ 最近は特に部落の者どもの

侵略行為があつたかと思えば、我の住処近くまで来られたのが迷子とは……世も末じやな

はあー……と人間臭くため息を零し、部落の近くまで送つてやるぞ、と珍しく迷子の救出をしたのが始まりだつた。

それから数年後、少年は逞しい大人の青年へと成長し、澄んだ碧い瞳はさらに輝きが増し、艶めく銀の髪を無造作に散りばめながら、やがて魔女に恋を囁くようになつた。

「ねえ、僕と一緒になつて欲しい。僕は村長の娘と結婚する気はないんだ。僕が欲しいのは初めて会つた時からキミだけだし、これからも貴女だけだよ」

「ふう……レイン、またその話か。何度も言つておろつ。我はこの地から離れられぬし、そもそも種族が違うであらう」

「そんなの関係ないよ。僕はただ、キミといたいだけなんだ。愛してるんだよ」

「むうー、またそのような戯言を

「あつ、またそんな連れないこと言つ。ねえ、僕は本気だよ?」

「あーはいはい、分かった、分かったからもう早よ戻るのじや。この数年、お主は見事に部落のものを騙し通し、魔女の住処へと来よつたが、うすうす怪しんでおるものもあるのじやぞ? そうなつては、お主が困るであろう」

村の中で居心地が悪くなつてしまつた、と軽く嗜めると、そんなの関係ないとばかりに甘い言葉が嵐のように飛び掛る。

何とか宥めて村に帰した後、魔女は一人思案に暮れていた。

(まいったのあ……これで嘘偽りがどこにもないと言つのだから、人間というものはほんに面白い。しかし……)

長い年月を、ずっと一人で過ごしてきた魔女にとって、その存在は悦びでもあった。

同種は我が一族を破門も同然の扱いであるし、一族の者もほとんど残つておらず、共に生きるものもない。

青年が村での成人の儀が終わつて、それでも村の者と一緒になるなら。

そこまでして自分を選ぶのなら。

そんな希望にも似た未来を、望んでしまつた。

ヴァンパイアが人間に恋をし、共に悠久の時間<sup>じき</sup>を生きる。  
そんな、あつてはならない未来を。

過去に同じ過ちを犯し、闇に葬られた先祖と同じ道を、選んでしまつた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0647i/>

---

Vampire Blood

2011年11月17日18時13分発行